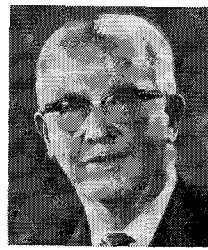




心の糧



十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン長老

救いが家族に関する事柄であり、家族という単位は今もまた永世にも、最も重要な組織であるということが述べられてきた。

教会が設立された目的の多くは家族に救いをもたらすことである。そして教会がその使命を果たした後もずっと天の族長制度は機能を果たしているのである。ジョセフ・F・スミス大管長が次のように語っているのはそのことである。「父として母として成功することは、将軍や政治家として成功するよりもはるかに偉大なことである。」マッケイ大管長はこれを補足して、「人が仕事や娯楽を家庭より上位に置いたら、その瞬間から霊的な退歩が始まる」と言った。

悪魔は知っている。「家庭は子供たちが人生の教訓、すなわち真実、名誉、徳、自制、教育の価値、正直な業、生きる目的と特権とを学ぶ最初でかつ最も効果的な場所であり、子供たちを育て教えるに当たって家庭にとって代わるべきものはなく、いかなる成功も家庭の失敗をつぐなうことはできない」ということを。(デビッド・O・マッケイ大管長、「家庭の夕べ」1968—69)

両親は子供たちを正しく育てる直接の責任を負っており、この責任は親戚、友人、隣人、学校、教会あるいは国家でも安全に代行できるものではない。

神は我々が悪魔の悪賢い企みを避け、主の崇高な道に従うよう家族を強くすべく祝福したもう。従って、やがて我々は天の宮居で、我らすべて、父も母も姉妹兄弟も愛する者共にたずさえてありと天父に報告できるのである。すべての席は満たされた、我々は皆天の家庭へ帰っていくのである。

— も く じ —

あなたの機関誌.....	433
死者のための正義.....	ジョセフ・フィールディング・スミス... 434
堅固な家族.....	マリオン・G・ロムニー... 438
愛をこめた1セントの価値.....	アン・ロミック... 444
若人から両親へ.....	ペリー・ダトワイラー... 446
すべてを必要とする時.....	ハーバート・F・ミュレイ... 447
愛とは.....	クラーク・スウェイン... 449
選 択.....	ケネス・W・ゴドfrey... 451
小さな友だちへ.....	ロバート・L・シンプソン... 453
ニュージーランドの友だち.....	ビキ・H・バッジ... 455
レーマン人、サムエル.....	マーベル・ジョーンズ・ガボット... 456
インディアンは忘れない.....	メアリー・プラット・パリッシュ... 458
ニュージーランドから来たヒラリーちゃん.....	460
いかにして証を得、持ち続けるか.....	ロバート・L・シンプソン... 461
いかに礼拝すべきか.....	ブルース・R・マッコンキー... 464
教師とは.....	ポール・H・ダン... 466
質疑応答.....	469
勇気ある人物ジョン・テイラー.....	レオン・R・ハートショーン... 473
ローカル・ニュース.....	478

10月のこよみ

- 6日 1867年 第1回総大会、ソルトレークタバナクルで開かる。
- 9日 1867年 世界的に有名なソルトレークタバナクルが献堂さる。
- 10日 1880年 ジョン・テイラー教会の第3代目大管長として支持さる。
- 14日 1855年 最初のドイツ人改宗者カール・G・メーザー、バプテスマを受ける。
- 17日 1901年 ジョセフ・F・スミス教会の第6代目大管長として支持さる。
- 23日 1947年 日本において伝道部再開さる。
- 27日 1961年 スイスステーキ部組織さる。

今月の表紙

家族で看病して元気になったカモメを、また自然に帰してやる美しい光景。トレバー・サウジー作。

聖徒の道

1972年10月20日発行
 発行人 マービン・S・ハーディング
 発行所 東京都港区南麻布5-8-10
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 電話(442)7459
 印刷所 太陽印刷工業株式会社
 定 価 100円
 予 約 一年間 1,000円
 外国 4ドル50セント

あなたの機関誌

今月号の「聖徒の道」

今月号のテーマは、今に限らずいつの時にも最も重要な話題の1つに数えられるテーマ、すなわち家族です。家族は教会の基礎となり、社会の柱石となるものです。教会が家族に非常な強調を置くのも何ら不思議ではありません。家族は永遠なものとされています。そこは、お互いや天父に対する愛と奉仕を学ぶ場であり、個人の進歩によって社会の改善が始まる場所です。そのことを知れば、家族はいくら強調してもしすぎることはないことを理解することができますでしょう。もし私たちが家庭で失敗するならば、その時最も大切なことに失敗しているのです。

救い主は、私たちに、光を輝かせと言われました。(マタイ 5:16) 私たちがまわりの人に貢献するその最たるものの1つは、理想の家族の模範を示すことです。世は正しい家族生活の模範を求めています。さて、ここで今月号の内容をいくつか拾ってみましょう。

大管長会メッセージ「死者のための正義」では、人の永遠性と神の大いなる慈悲、家族を死後も結ぶ救いの計画が指摘されています。

「すべてを必要とする時」では、家族と、最優先させるものについて語られています。多忙な家庭にある大勢の教会員からの助言や感想が載っています。何に時間を取られ、何が私たちの生活を忙しくしているかは、場所により様々でしょうが、原則や、優先させるべきものは同じです。

愛はしあわせな家族生活に不可欠なものです。クラーク・スウェインの「愛とは」では、親や若者が関心を持つべき良い考えのいくつかが紹介されています。

「選択」には、父親は自由意志を尊重しながら息子をどう導くべきかの立派な例があげられています。

その将来

「聖徒の道」の基本的目標は、教会員の有用性に供することです。私たちは、証を強める素材と、福音の原則を教え、教会員がそれらを自分の生活に生かすことのできるように援助する資料を出版することにより、その目標が最良に達成できると考えます。

ぜひ、兄弟姉妹の意見、提案を送って下さい。読んで楽しかったもの、役に立ったものを知らせてほしいのです。そして今後の機関誌にどのような記事を望むかをお教えいただきたいと思います。私たちはできるだけ多くの手紙を掲載するよう努め、回答の必要な手紙にはすべてに返答するよう最善を尽くすつもりです。さらに大切なことは、教会機関誌の発行された目的に添うべく、読者からの提案を指標として努力することです。次の住所宛ぜひ手紙をお寄せ下さい。

(〒106) 東京都港区南麻布 5-10-25 中正堂ビル 6 F

末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部

私たちは読者からの実話、記事、詩などの原稿を期待しています。信仰と証を強める内容で、それが私たちの標準に合うと判断され、掲載のスペースがあれば、紙面に発表することを喜びとするものです。

死者のための正義

全能なる神が全宇宙を不変の律法により統治しておられるがゆえに、その創造物中最も偉大なる人間が自らその律法に従うべきことは、万人の認めるべきところである。主は、教会に対する啓示の中で、この真理を簡潔に力強く述べておられる。

「およそ、すべての王国には皆一つの律法を与えらる。それ、王国は多し。そは、如何なる空間にも王国なきは無くまた大なる王国も小なる王国も、その中に空間なき国はあらざるなり。而も、そのいかなる王国にも一つの律法を与えらる。且つかなる王国にもまた或る制規と条件ありて、すべて、これらの条件に堪え得ざる者は、皆義しとせられざるなり。」(教義と聖約88:36-39)

この真理は自明である。かくて我々は、神の王国が律法によって支配され、そこに入ろうと望む者は皆この律法に従うべきであると考えることこそ、唯一、理にかなうことである。「見よ、わが家は秩序の家にして混乱の家にあらずと主なる神言ふ」(教義と聖約132:8)

主は人間に、イエス・キリストの福音と呼ぶ数々の律法を与えられた。靈感と霊の導きに欠けるがゆえに、人はそれらの律法に関して異なるであろう。しかし、そのような律法が現に存在し、その王国に入りたいと願う者は皆その律法に従う者であるとい

う事実に関しては、ほとんど論ばくできない。

我々は、原則として、まず最初に父なる神、御子、聖霊を信ずる信仰、第2にすべての罪の真心からの悔い改め、第3に罪の赦しの水に沈められるバプテスマ、第4に聖霊の賜を授ける按手礼を教えている。まずこれらの全条件にかなわずして、神の王国に入り得る者は1人もいない。事実これは、主がニコデモに告げられたことである。「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネ3:3)

この命令が真実であり決定的であることは、我々の救い主への信仰を告白するすべての人々の受け入れねばならないところである。しかしながら過去幾世紀いわんや現在にも、いわゆる多くのキリスト教社会にあって、この教義の誤った解釈が重大な間違いを引き起こし、無意識のうちにゆゆしい罪を犯すこととなっているのである。私が言うのは、肉にある間に主を信せず、死んで地を去る前に主について聞かない人々は永遠に呪われ、地獄の苦しみから逃れることができないという教義のことである。福音の真理を誤って解釈したこの概念は、西暦時代のごく初めからいわゆるキリスト教の教えとなってきた。しかし、これはイエス・キリストの福音ではなかったのである。

故 ジョセフ・フィールディング・スミス大管長

ダンテは「神曲」の中で、13世紀に教えられていた教義の通り、キリストを知らずに死んだ不幸な魂が呪われるという教えを描写している。その物語によれば、ダンテは森をさまよっていて、ローマの詩人ヴァーヅル²に会った。彼はダンテに地獄と煉獄の罰のさまを見せ、そのあとで天国の様子を見せようと約束する。彼はヴァーヅルに従って地獄を通り、地獄の第一圏谷、辺獄(リンボ)へ入る。そこでは、正しく誉れある人生を送ったがバプテスマを受けなかったために罰に定められ、救いの祝福を永遠に拒否されている人々のいる所である。ダンテが地獄の上層部からそれらの悲惨な人々を見おろすと、彼は「群をなす人の数は多く、子供も女も男もいる」のに驚くと書かれている。

案内者は尋ねる、「おまえはこの連中がいかなる魂か聞きたくないのか。」

ダンテは知りたいそぶりを示し、案内者はさらに続ける。「先に進む前に一つおまえに教えてやろう、彼らは罪を犯したのではない、徳のある人かもしれないが、だがそれでは不足なのだ、洗礼を受けていないからだ。洗礼はおまえが信じている信仰に入る門だ。キリスト教以前の人として崇めるべき神を崇めなかったのだが、実は私もその1人だ。こうした落度のためにほかに罪はないのだが、私たちは破滅

した、ただこの憂目にあり、〔天に上る〕見込みはないがその願いは持って生きている。」

このように罰せられている人間が、皆悲惨な苦しみから免れる特権を持てなかったかどうかを知りたいと望む熱心な人の世からの客に問われて、霊の詩人は、我々の最初の両親からキリストの時代に至るまで、神を知っていた正しい人々は昇栄したと説明する。しかし、キリストについて聞かなかった不幸な人々については、「おまえに知ってもらいたいことは、それ以前には、人間の魂で救われたものは無いということだ」と言う。

しかしながら、ダンテはこの不幸な誤った教義の創始者ではなかった。その教義はイエス・キリストのまことの教えに背いた初期の時代から続いてきていたのである。

歴史家モトレーは、「ドイツ共和国の幕明け」の中で、キリスト教が初めて西ヨーロッパに紹介された時の出来事を次のように記述している。フリースランド人の長ラドボッドは一見して改宗し、バプテスマを志願した。そしてその日一行は川に下って行き、水に浸された。儀式が行なわれるのを川の中に立って待っている間に、ラドボッドは司祭のウォルフランに向かって、「今私の死んだ先祖たちはどこにいるのか」と聞いた。すると知恵よりも熱心が先

に走った愚かな司祭は、「地獄で不信者たちといっしょにいる」と答えた。異教徒の長は水から引き上げられながら、怒りの気持をあらわにして、「そうか、それならば、お前たちの天国のちっぽけなひもじいキリスト教の群れに住むよりは、ウォーデンの神の宮で私の先祖たちと祝宴をはった方がよい」と答えた。(第1巻R20) このような時に、あなた方ならどういふ答えをするであろうか。

同じ恐るべき教義が、あの遠い霊の暗黒の時代から鳴り渡り続け、すでに世を去った愛する人々の救いを熱心に求める人の耳に、その恐ろしい苦しみの音が響き続いたとは、何という醜業か。死んだ子供がキリスト教徒でなかったために永遠に追放されると、善意ながらも間違っただけで教えられた牧師の口から聞かされて怒り出した、1人の真剣に子供を愛する母親のことを思い出す。

私はその母親の家を訪れた時、彼女は次の話をした。数年前、彼女は1人の幼児を亡くした。洗礼を受け牧師の所へ連れて行く前に、その子供は他界した。両親はその子の葬式を司り、キリスト教徒として埋葬してほしいと牧師に頼んだが、ささやかな頼みは厳粛に、しかし残酷に拒絶された。牧師は、子供が永遠に天国を追われることを告げた。両親は失意に打ちのめされながら、子供をその教会の儀式

にあずからせることもせず、「キリスト教の埋葬」もせず、追放者のように葬った。この愛情深い両親の心の痛手はいかほどであろうか。彼らの心はいかに激しく引き裂かれたことであろうか！

何年かの間、その牧師の教えを信じた母親は、この上ない精神的な苦痛に悩み続けた。子供がキリスト教徒にならなかったのは子供のせいではないことを、彼女は知っていた。子供に悪い所は何もなかった。自分自身が悪かったのではなかろうか？ 誤った教えのゆえに、彼女は、子供が永遠の苦しみを受けるようになったのは自分のせいではないかと考えた。彼女は、人を殺したあとで悔い改めたにもかかわらず、すでにその命を取り戻せはしない殺人者のような気持で、魂は苦悶し、地獄の罰を感じた。

私とその苦悩する母親の家を訪れた時こそ、しあわせの日であった。私が彼女にその教えの間違っていること、その教義を生じた地獄の深さほどにまったくの間違ひであることを説明した時に、彼女の悩み深い表情に浮かんだ喜びを今でもありありと思ひ浮かべることができる。私は彼女に、それはイエス・キリストの教えではないと教えた。イエス・キリストは幼な児を愛し、彼らは天国に属していると話した。そして、モルモン経の中から、息子モロナイに語ったモルモンの言葉(モロナイ8)を読み、主

「自己の責任を負える年令に達することなく死ぬすべての子供らは、日の栄の王国にて救われる。」(ジョセフ・スミス)

はジョセフ・スミスに、「責任を持てる年令(すなわち8才)に達する以前に死んだ子供たちは、皆日の栄光の天国に救われる」(「教会歴史記録」第2巻 P. 381)と啓示されたことを説明した。確かに、主は回復の栄えあるこの時代に、そのことを告げられたのである。

「福音の知識なしに死んだすべての者、もし生き長らえることを許されていたなら福音を受け入れたであろう人々は、神の日の栄光の継承者となるであろう。またこれよりの福音の知識なしに死ぬ者で、真心からそれを受け入れたであろう人々も、日の栄光の継承者となるであろう。なぜならば、主なる我は万人をその働き、その心の望みにより裁くからである」(「教会歴史記録」第2巻 P. 380)

キリストの福音は慈悲の福音である。そしてそれは正義の福音でもある。そうであらねばならない。なぜなら、この福音は慈悲の神より来るものであって、一部の宗教家たちが今でも信じ、説いているような残酷な化け物から来るのではないからである。それはこのように言う。

「神の命により、神の栄光を顕わさんがため、ある人々と天使たちとは永遠の生命に予定され、他の人々は永遠の死にあらかじめ定められている。このようにあらかじめ定められ予定された天使と人間と

は、決して変わることなくその状態に計画されている。その数は決まっており、増減することはない。」

真理の福音が、このように忌まわしい有様に変り果てるまでにゆがめられ、けがされてきたことを想像するのは恐ろしいことではなからうか。慈悲と同様正義も、福音の知識なしに死んだ人々のために嘆願をする。もしイエス・キリストを知らずに死んだ群衆のすべてが、たとえ地獄の第一の場の苦しみであっても、望みなく永遠に地獄の破滅のもとに置かれるとしたならば、正義はどう行使されるのであろうか。

聖典は告げている。「義と公平はあなたのみくらの基、いつくしみと、まことはあなたの前に行きまします。」(詩篇89:14)

義なる神の慈悲と愛は、神の子供たちすべてに及ぶ。予言者ジョセフ・スミスにより回復された福音の中で、主は再び死者の救いを宣言して、こう述べておられる。

「……汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人、歌声を張り裂けしめよ。死者よ、王インマニエルに永遠讚美の歌を語り出だせ。インマニエルこそ創世の前より、われらをして死者をその囚屋より贖うを得しむることを定めたまえり。そは囚人は釈さるべければなり。」(教義と聖約 128:22)

堅固な家族

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

社会の致命的な病弊の核心は、揺れ動く家庭である。そのことを知り、関心を抱くところから、私は聖典が堅固な家族とどのように結びついているかをお話したい。

それを手短かに要領よく説明するには、聖典が堅固な家族と結びついているさまは、設計図と建物との関係と同様であると言えばよいであろう。

テンプル・スクウェアの東隣の区画内に、高層建造物が建築されつつある。建物の土地が掘り起こされる前に、その詳細が底土から屋上に至るまで考慮され、計画され設計された。労働力や物質の詳細にわたった明細書が書類にまとめられた。地震や風圧に耐えるためにどの程度の強さの鋼材を用いるかを決めるのに、大がかりな研究調査がなされたことを記憶している。完成した計画や明細は、仕事にかかる前に業者の手に渡され、熟考された。建物の建築中は、微細にわたってこれらの計画に従うのである。

我々は聖典から、主御自身が、地の創造される以前にそれにかかわるすべてのことを細部にわたっ

て計画されたことを知る。

「……われ主なる神の天地を造りたる日に天地の創られたる時、天地の生成したるはかくの如し。野のすべての木はいまだ地にある前にして、野のすべての草はいまだ生えざる前なりき。そはわれ主なる神、わが語りしすべてのものを、これらがいまだ地の面に自然に在るに先だち霊として創りたればなり……。」(モーセ 3:4-5)

さて、家族は建物よりもはるかに大事である。地球そのものよりも価値は大きい。主は、地球を含めたすべての創造物は、主の偉大なみ業、すなわち「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらず」こと(モーセ 1:39)のためにあると言われた。そしてさらに、だれも永遠する堅固な家族の一員とならずに永遠の生命を受けることはできないと啓示された。そうであるならば、神が最も大切な永遠の創造物である家族を築くために、計画や明細書を持たなかったと考えられるはずがない。事実、神はそのような計画、明細を持っておられた。その2つは聖典に述べられている。

家族を築きあげる神の計画、明細を理解し、それに従うことは、建物が設計図に従い、惑星がその軌道に従うことが重要であるのと同じく、永続する堅固な家庭をつくるためにはぜひとも必要である。家族を築く神の計画、その設計図は、現代社会の揺れ動く家族にとって、ほとんど理解されず、守られてもいない。

聖典は、家族は人間の定めたものではなく神聖な制度であると啓示している。神が地球上の全人類の文字通りの父であること、人の霊は神より生まれた息子と娘であること、および神の業、その栄光は人に神御自身が享受しておられる完全と昇栄とをもたらずことであると、はっきり宣言している。聖典には、人がそのような完全を得るためには、骨肉の体を得てこの世の試練を受けなくてはならないと説明されている。

その目的を達成するために、神の計画には、神の霊の子供たちが肉体を受け、夫婦が聖なる神権の権能により一体となり、そのように結婚して、この世にある間、ふえよ、地に満ちよとの聖約を身に受



けること、すなわち神の他の霊の子供たちのために肉体を用意し、彼らに永遠の生命を得させようとする神の手伝いをなすことが示されている。

その計画には、そのようにして結婚した夫婦は永遠に夫と妻であり、そこには完全に到達するまで絶えざる進歩があり、やがて彼ら自身も霊の子供たちを持つ両親となることが言われている。

これが、地の基がすえられる以前に、家族のために主の設計された計画であった。

その偉大な計画を実施するために、「神は自分のかたちになを……男と女とに創造され」（創世1:27）、かたちを似せるばかりでなく、2人を結びあわされた。すなわち御自身の結婚状態にならって夫と妻を永遠の聖なる婚姻関係に置きたもうた。そうして、「生め

よ、ふえよ、地に満ちよ」（創世1:28）と彼らに命じられたのである。

結婚は人が作った社会慣習であり、自由に廃止できるという考え方は、誤った考えである。結婚は単に神の命令であるばかりではない。神の計画では、結婚は永遠に続く堅固な家族を築くことが目的とならなくてはならない。パリサイ人がイエスのもとに来て「夫はその妻を出しても差しつかえないでしょうか」と尋ねた時、イエスは答えて言われた。「『モーセはあなたがたになんと命じたか』。彼らは言った、『モーセは、離縁状を書いて妻を出すことを許しました』。そこでイエスは言われた。

『モーセはあなたがたの心が、かたくななので、……この定めを書いたのである。しかし、天地創造

の初めから、神は人を男と女とに造られた。それゆえに、人はその父母を離れ、ふたりの者は一体となるべきである。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない』。家にはいったから、弟子たちはまたこのことについて尋ねた。そこでイエスは言われた、『だれでも、自分の妻を出して他の女をめとる者は、その妻に対して姦淫を行うのである。また妻が、その夫と別れて他の男にとつぐならば、姦淫を行うのである』。（マルコ10:2—12）

この聖句に見出されるイエスの教えが守られたならば、誉れある結婚が全人類の目標となり、離婚はなくなることであろう。それにより、家庭をゆさぶる大きな原因の1つが取り除かれる。

イエスが結婚と離婚について教えられた以外にも、多くの聖句がある。たとえば、パウロはコリント人へ、「主にあっては、男なしには女はないし、女なしには男はない」と書き送っている。（Iコリント11:11）

パウロが結婚について語った事

堅 固 な 家 族



柄の中には、ペテロと同様、幾分「わかりにくい」ところがあるが(Ⅱペテロ 3:16)、夫婦の離縁に關してははっきりと、しかも強調して述べている。彼は主に教えられて言った、「結婚している者たちに命じる。命じるのは、わたしではなく主であるが、妻は夫から別れてはいけない。(しかし、万一別れているなら、結婚しないか、それとも夫と和解するかしなさい)。(Ⅰコリント 7:10—11)

結婚と離婚について述べた近代の予言者の言葉は、聖書の言葉と完全に一致している。

予言者ジョセフは結婚について次の啓示を受けた。「また、われ誠に汝らに告ぐ、何人にも結婚を禁ずる者は神より聖職の按手任命を受けたる者にあらず、そは結婚は神の人に定めたるところなればなり。」(教義と聖約 49:15)

1845年4月6日に述べられたブリガム・ヤング大管長の言葉を引用しよう。「私はあなたがたに、永遠の果てから変わらずに存在するこの真理を告げよう。私は地の面のあらゆる人間に告げる。救わ

れたいと願う男性は、そのかたわらに1人の女性を持たずして救われ得ないと。」(「タイムズ・アンド・シーズズ」第6巻P.955)

次にあげる引用文は、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の父、ジョセフ・F・スミス大管長の言葉である。

「私はこれを強調したい。シオンの若者はこの結婚制度が人の手による制度ではないことを認識してもらいたい。これは神の定められた制度である。また尊いものである。自らの宗教に忠実で結婚できる年齢に達している人が独身でいるべきではない。男性が1人でいるのは不便だから、自らの考えや理想に合わせ、気の向くままに結婚し、離婚するというために結婚が定められたのではない。結婚に關して非常に大切なことがある。現世を越えて、永遠に続く事柄である。それによって、霊が世に生まれ、男、女としてこの世で体を得るのである。結婚は人類を存続させるものである。結婚が行なわれなければ、神の目的は達成されず、徳は砕かれて悪徳と墮落と化し、地は空虚なものとなるであ

う。」(「福音の教義」第2巻 p.3—4)

すでに述べたように、主の御計画全体を考えると、永續する結婚の制度の目的は増殖、すなわち神の霊の子供たちに肉体を与えることであった。結婚と離婚に關連して、聖句にはこのことが特に言われている。

「この故に、人各々一人の妻を有つことは義し。而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは、この世の造られたる目的に適わんためなり。すなわち、この世のいまだ創られざる前に人の創られしに従いて、人間の数のこの世に充たされんためなり。」(教義と聖約 49:16—17)

他の聖句で、主は「わが誠命によりその子孫の殖えて地を充たさんため、また創世の前よりわが父によりて為されたる約束を充たさんため、また永遠の世に於て最高の榮に進み、かくして人々の霊を生まんがために」妻が夫に与えられ、「ここに於てわが父の御業は絶ゆることなく、かくして御榮は父に在るなり」と言っておられる。(教義と聖約 132:63)



私は、これほどに深く栄光に満ちた聖句を他に知らない。この聖句は、結婚の目的が、まず「この世のいまだ創られざる前に人の創られしに従って、人間の数のこの世に充たされんため」であり、それにより御父のみ業は続き、「御栄は父にある」と言い、第2の目的は、人間が「創世の前よりわが父によりて為されたる」約束に従い、「永遠の世に於て最高の栄に進むこと」であると述べている。

結婚、離婚および子供を生むことについて、この神聖な概念を心

に思う時、近代の予言者たちの次の言葉は容易に理解できる。

ブリガム・ヤング大管長は述べた、「幕屋を得ることを待ち望む無数の汚れなく神聖な霊がいる。さて、我々の義務は何であろうか。—彼らのために幕屋を備えること、それらの霊が悪い家族に送られて悪徳と墮落とあらゆる罪のもとで訓練されないように、針路をとることである。できる限りのあらゆる霊のため幕屋を備えることは、義しい男女すべての義務である。」（「ブリガム・ヤング説教集」P. 197）

ジョセフ・F・スミス大管長は1917年に、産児制限について述べた。

「教会員の間産児制限の風潮と考え方があることを遺憾に思う。これははなはだしい悪であると考え。健康と体力を有し、繁栄に必要な純潔を有している夫婦にそれが行なわれているならば、罪悪であると考え。産児制限をしている人々はやがて落胆を刈り取る。私は何らためらうことなく申しあげる。この悪習は今日世界最大の罪悪であると信じている。

（「福音の教義」第2巻P. 11）

この事柄につき、最近大管長会から声明が出された。

「我々は墮胎と断種についての法案に関する問題を熟慮した。我々はこれらの重大な事柄について律法をいささかなりとも修正、拡張、自由化することに反対である。」（1970年10月27日付、ワシントン州ステーキ部長への書簡）

次に、堅固な家庭に関係のある聖句を幾つかあげよう。

「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない。」（箴言22：6）

「父たる者よ。子供をおこらせなくて、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい。」（エペソ6：4）

ベンジャミン王は両親に、「自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはしないであろう。……自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして、……悪魔に仕えることを許さず、……自分の子供らに真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばな

堅 固 な 家 族

らぬ事とを教えるであろう」と訓戒した。(モーサヤ4:14—15)

「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。

また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」(教義と聖約68:25, 28)

「……われは汝らの小児たちを光明と真理の中に導き来れと汝らに命じたり。されど、われ誠にわが僕フレデリック・ジー・ウイリヤムスに告ぐ。汝は、今なお引きつずきこの罪に定められたり。すなわち、汝はいまだにわが誠命に従いて汝の子供たちに光明と真理を教え居らず、さればかの悪魔はいまだに汝を支配し居れり、これ汝の苦しみを受くる所以なり。われ今汝に一つの誠命を与う。すなわち、汝もし救われんと欲せば自身の家を整うべし。汝の家には正しからざること多ければなり。」

(教義と聖約93:40—43)

次に、子供たちの両親に対する義務とは、

「子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである。『あなたの父と母とを敬え』……『そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう。』(エペソ6:1—3)

また夫と妻は、

「妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。夫たる者よ、妻を愛しなさい。つらくあたってはいけない。」(コロサイ3:18—19)

これらの聖句に従うことは、堅固な家庭を築く大きな力となる。

私は、もう1つの事柄、すなわち祈りということについて、聖典の教えをとりあげたい。聖典にこれほどひんぱんに語られている事柄、家庭を堅固にするのにこのように役だつ事柄を、私は他に考えることができない。記録されている人間と神との最初の交わりは、祈りによる結果であった。記録には、エデンの園を追われてしばらくののち、「アダムとその妻イヴ





主の御名を呼びたるに、エデンの園を指して行く途のかなたより声聞えて彼らに語りたまえる……主、彼らに誠命を下して宣いけるは、主なる汝らの神を礼拝し…」（モーセ5：4—5）と記されている。

この時から今まで、聖典は繰り返し祈れと我々に勧告している。詩篇の作者は歌った。

「しかしわたしが神に呼ばわれれば、主はわたしを救われます。夕べに、あしたに、真昼にわたしが祈り、嘆きうめけば、主はわたしの声を聞かれます」。(欽定訳詩篇 55：16—17)

アルマ書34章に記録されているあの祈りの勧めの中から以下の事柄を引用しよう。

「家に居る時はあなたたちの家族全体について朝も昼も晩も神に祈れ。

こればかりではない。あなたたちが一人で部屋に居るときも、秘密の所に居る時も、また野に居るときも心にあることをうち明けて祈れ。声をあげて主に祈らない時でも、自分の為また自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中

で主に祈れ。」(アルマ 34：21, 26—27)

イエスは1人で祈られ、弟子たちと共に祈られ、弟子たちのために祈られた。イエスは彼らに祈れと教え、祈りの形を示された。

この最後の神権時代を開いた予言者の見神は、祈りに対する答えとしてもたらされた。

教会が組織される2年前、主は次の教えを与えられた。「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ、また現にサタンの仕事に力を与うるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約 10：5)

教会が組織された時、主は神権者に、「各会員の家庭を訪れ、…すべて家庭の務めにいそむように勧めよ」と言われた。(教義と聖約 20：47)

たしかに、神は家庭を強固にするための計画を持ちたまひ、その計画を聖典に啓示された。主が我々のすべてをその計画に従うよう助けたもうことをへりくだって祈るものである。イエス・キリストのみ名により。アーメン。



アン・ロミック

「1セントあれば、あの花のひとつを買うのになあ。」彼の声は自信に満ち、目には満足気な輝きがあった。それは、今や彼は1年生で字が読めるからであった。ただし、読めるのはところどころだった。かごに掛けた紙には急いで書いたらしい文字で、かごの中味

愛をこめた 1セントの 価値

が1つにつき1セントであるという意味のことが記されてあったが、彼の読めるところは「1セント」の部分であった。

「あの花を買ってどうするつもりなの？」何か計画で胸がふくらんでいるらしい彼の目を見ながら私は尋ねた。「ぼくの部屋に飾るのさ。」彼ははっきりとそう言った。そしてそのはっきりとした口調からは、私がなぜそのようなわかり切った質問をするのか不思議だという感じが表われていた。

私は財布の中に手を入れながら「いいでしょう」と言った。「風船ガムよりはましでしょうからね。」私が小さな銅貨を渡してやると、彼はそれを大切そうにカウンターの方へ持って行った。店員は、銅貨と引替えにばかに長い針金の茎のついたプラスチック製の

ピンクの花をきちんと包んで彼に渡した。私は、彼が赤と白の自分の部屋に合わせて、淡いピンクを選んだのだらうと思ったが、たいの1年生は配色のことにまで関心はないことに気がついた。

車のところまで戻る間、私たちは何も言葉を交わさなかった。私は袋一杯の食料品を抱え、彼は茎のあたりでくしゃくしゃになった茶色の小さな袋を大事そうに持っていた。重そうな花が1輪袋から少し顔を出し、彼が歩くたびにあちこちへ楽しげにはずんでいた。

「ジュリーの誕生日にあげられるかなあ。」

「ジュリーの誕生日に何をあげるんですって？」私はぼんやりしながら聞いた。

「お花だよ。」特別な買物をしたことをもう忘れてしまっている私に、彼は少しいらいらしながら言った。

「それに」彼は続けて言った。「これはピンクだからジュリーのお部屋にピッタリだと思うんだ。ジュリーはこれを棚に飾るかもしれないな。」

「そうね。いい考えだわ。でもジュリーの誕生日には、まだ間があるわ。」

ジュリーは彼にとって1番上の姉であり、17才のとても美しい娘だった。彼女は時々ひどくはしゃぐ時があるかと思うと、反面とて

もひっそりとした、静かな時があった。

「ただだまってあげてもいいの？」彼はやっと決心をしたというように尋ねた。「つまり、何も理由がないのにあげるということだけど。」

「もちろんよ。」私は声がつまったのを隠そうとして、あわてて息をのみながら言った。

「それこそ一番の贈り物よ。あなたが何の理由もなく贈り物のできる人へのね。」

2人で小さな声で相談を進めるかたわら、私は食料品を片づけ、彼は、暖炉に暖まりながらひとり静かに座っているジュリーを見つめていた。

最後に私がひざまずいて、戸棚の一番下にスープのかんをしまっていると、ちょうど彼と目が合う高さであった。彼はこう尋ねた。

「どうやってあげたらいいのかな？　なんて言ったらいいの？」少し興奮気味で、しかも恥ずかしそうでもあった。したい気持と気の進まないところ、勇気と恐れが入り交っているようだった。

「ただあげるだけのことよ。それからこんなようなことを言えばいいわ。『ジュリー、これ。ぼくは姉さんのこと大好きだから。』それからキスをしてあげなさい。」

「いやだよ。」彼の腕は前に伸び、手のひらが空を打って、まる

で交通巡査が車を止めている時のような格好をした。「キスなんていやだよ。」

彼は後ろを向くと、別の部屋の方へ歩いて行った。そしてこの場にふさわしく、真剣な顔つきで一生懸命だった。

贈り物を手にジュリーの前に立った時、彼の口はひとりでに笑いかけ、目はうれしそうであった。

言葉は聞こえなかった。言葉は花と共に彼女に伝わっていた。しかし私には見えたのである。彼女の顔が輝き、感傷にひたっていた口もとに赤味がさし、自然にはほえみが出てきたのを。彼女は腕を弟の小さな肩にかけ、左の頬に大きな音をたててキスをした。片手に花を持ち、もう一方の手で弟を抱きしめた。そしてその時、プラスチックのピンクの花がばかに長い針金の茎の先で楽しそうに踊っているのが目に映った。

五児の母親であるロミック姉妹は、ここ数年作品を書いているがこれは初めて活字になったものである。彼女は、サン・レアンドロ（カリフォルニア）ステーキ部、サン・ロレンゾ第1ワード部において、扶助協会第二副会長およびデン・マザー（ガールスカウト）として働いている。

若人から両親へ

ペリー・ダトワイラー

ダトワイラー兄弟はユタ州立大学を卒業後、現在合衆国陸軍にあって兵役に服している。カシュ・イースト・ステーキ部、ローガン(ユタ州)第10ワード部に所属する彼は、かつて台湾で宣教師として働いたことがある。(1966—68)

儒学¹者のひとりである曾子いわく、「古人世に高德を表わさんと欲すれば、まず己れをよく治めたり。己れをよく治めんと欲すれば、まず己れの家族を律し、家族を律さんと欲すれば、すなわち己れを養いたり。……

己れを養いて初めて家族は律されん。家族を律して初めて己れを正しく治め得ん。己れを正しく治めて初めて、世は平和となり得ん。」

この説教は、現代とは異なった時代に書かれたものである。封建時代の中国は崩壊寸前であった。政治的・社会的な混乱、戦争、飢きん、そして絶望感が人々の心に平和と一致、秩序、何かを生じる力を求めさせた。

曾子は平和の原因、根源、そして平和をもたらすものとして、外的な状態ではなく人の心について指摘したのであった。古代の中国では、人を高めることは過去の伝統や道徳を固く守ることによってなされた。私たちにあっては、このような修養はイエス・キリストの教えと予言者たちの教えによってもたらされるものである。

こうして平和は、からみ合った糸のような社会関係を通して外に現われる個人の心の状態そのものとなる。この関係は強めたり導いたりできるが、平和は究極においても依然として個人の特権をとどめるものである。自らと神から平和すなわち平安を得ている人は、多くの人々が望んでいる秩序ある世界にあって、力強い働きをなすものである。

古代中国の賢人はさらに、家族はそのような世の中を造る1つの石であると言っている。これは社会関係と人間同志の交流が、より良い世界を形造る上で第2の段階となることを物語っている。

父親は家族の中心として最前線にいる。作家のエリック・フロム²が述べているように、父親は「思考の世界、人造の

物質でできた世界、律法と秩序の世界、訓練の世界、そして旅行と冒険の世界」を代表し、「子供を教え、世の中の道を示す人である。」

子供の進歩成長にとって非常に重要なことの1つは、両親が子供との関係において共に教えることがらである。

人類の歴史を変える力をもつようなそんな重要な役割を果たす人は少ない。しかし、私たちの多くは家族関係を変える立場にあり、私たちのすべては自分自身を変えることができる。

自らの霊性と人間性を養い、心の平安を培っている両親は周囲にいる人々に影響を及ぼさずにはいない。自らを高め、人がこの目標に至るのを助けることは、恐らく私たちにとって最大のチャレンジであろう。このような成功を収める両親は、あらゆる名誉を受けるにふさわしい。すなわち、中国の賢人が言ったように、すべてのものがそれに帰するからである。

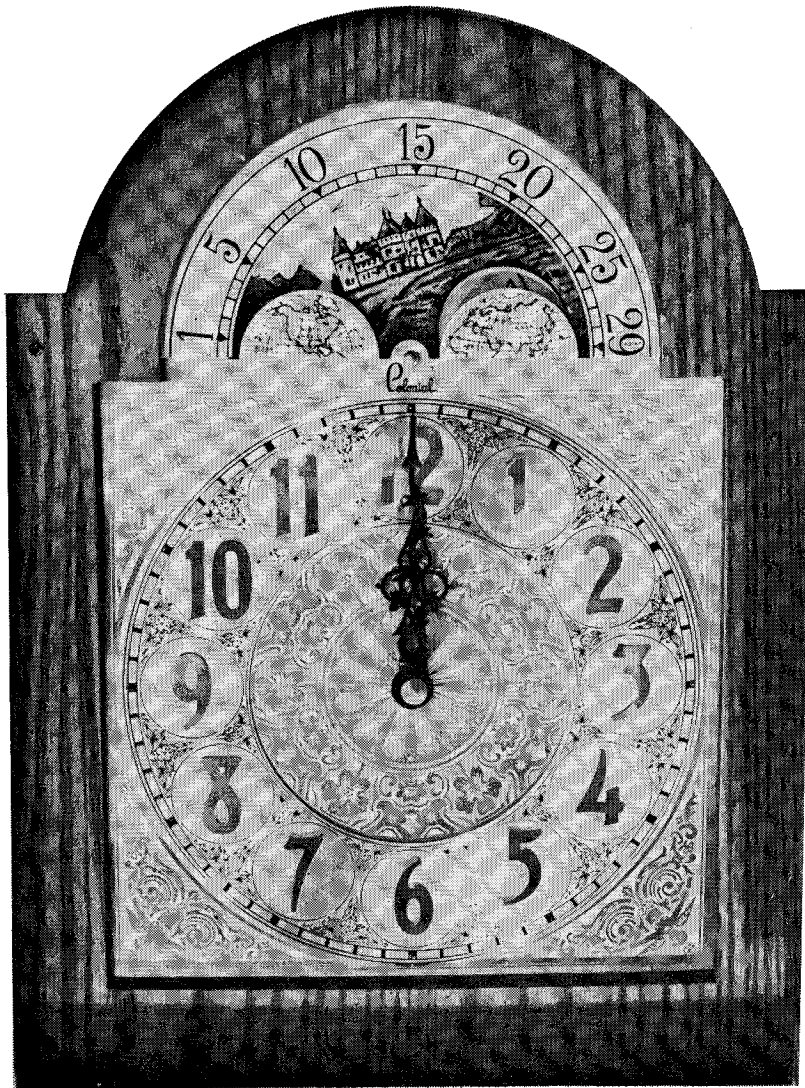
若人は一体両親に何を求めているのだろうか。まず第一に彼らは偽らない誠実な姿を求めている。おそらく両親のなしている最大のことからは、誠実で修養を積んだ人間味あふれる人物になることであろう。

ではどのようにしたらそういう両親になれるだろうか。他のあらゆる努力と同じように、そのような両親は、訓練と忍耐と専心、そして関心を抱くことによるのである。

修養を積み、慈悲深い心を備えた人は、世の指導者と呼ばれる人々がしようと思う以上に、世の中を変えるためにさらに大きな働きをなし、人類に貢献するであろう。平和は人の心から始まる。自らと神から平和すなわち平安を得ることは非凡な業ではあるが、他の人々や自分の子供がこの目的に到達するように助けを与えることは、真に偉大なことへの根本である。

1、儒教—古代中国の哲学で、個人の徳、家族への献身、正義を重んじる。

2、エリック・フロム—1900年ドイツ生まれの米人精神分析学者。



すべてを 必要とする時

ハーバート・F・ミュレイ

「人は自らに対して責任を有している。人は自らの家族に対して責任を有している。また人は教会に対し、自らの職業に対し、責任を有している。つりあいのとれた生活をするために、人はこれらのどの分野にあっても働きのできる方法を見出す必要がある。」

これは、末日聖徒イエス・キリスト教会第11代大管長ハロルド・B・リーの言葉である。

末日聖徒が教会にあって正しい働きをなし、職業において成功を収め、地域社会に奉仕し、同時に家族に対して必要な時間とエネルギーを費やすには、どのようにしたらよいであろうか。多くの教会員は自分がしたいと思う多くのことをするために、時間と自分の持てるものをどのようにやりくりしたらよいかという問題を抱えている。

教会は、この世的な事柄と霊的な事柄においてなしとげるべき何かがあることを信ずる人々を必要としている。現世に

おいて、また永遠の世において、王国の偉大なことをなしとげることができると確信している人々を必要としている。そして教会は、それらを固く信じて行動に移す人々を必要としている。これらの人々は教会の発展に寄与する人々である。しかしいかに多くのエネルギーを持った人々でも、時間と責任のつりあいをとる必要がある。

私たちはみな自分が何を優先すべきかを明らかにする必要がある。しようと思っていることを重要な順に挙げるができるとしたら、もっと容易に決定ができるに違いない。

成功している家庭生活については、最近教会の日曜学校会長に任命された心臓外科医のラッセル・M・ネルソン博士が興味深い意見を述べている。ネルソン兄弟姉妹には9人の娘と1人の息子がいる。

「真実成功している家庭生活にとって不可欠な要素は、夫と妻の間で愛を養うことである。

大家族では、母親はその全時間を子供のために費やしがちである。そしてこのことが夫と妻の関係にとって妨げとなるとすれば、いかに子供の世話がよくなったとしても、その努力は有名無実と言えよう。

子供は来て、やがて去って行く。彼らは伝道に行き、大学に行き、結婚をする。そしてその他いろいろな理由で、家庭から離れて行く。そうしている間に、もし両親の間の愛がさめることがあるとしたら、それは大きな犠牲である。このような状況では、永遠に有効な約束などほとんど望めない。

夫と妻の愛は動的なものである。常に成長していくものと思わなければならない。それは庭のようである。手入れをしなければすぐに雑草がはびこってくる。我々には子供をふさわしく育て、職場と教会において義務を尊重するのみならず夫婦の愛を常に強く生き生きとしたものにする責任があるのである。」

4人の子供の父親であり、十二使徒地区代表でもあるワード・B・アンダーソン兄弟は次のように語っている。「私は家庭における責任を遂行することができず、教会の仕事をその言いわけにしている兄弟たちを見てきました。私はその人たちに対して、自分の仕事を理由に家庭や教会の責任をかえりみない人と同様にあまりいい気持を抱きませんでした。」

6人の子供の父親で、テキサス州ルボックステーク部のステーク部長として働いているフランクリン・S・ゴンザレスはこう語っている。「教会の責任ある地位についている忠実な末日聖徒は、自分の家族への特別な助けを主に求めています。しかしこれは、より懸命に働き、良き父親となるためにより効果的に生活しなければならないということにはほかならないのです。」

ゴンザレス兄弟は、父親として必要とされる事柄についてどれが最も大切かということを強調しています。「このことは、仕事が教会や家庭ほど重要なものではないと早くから決めていたことに関係しています。教会と家庭は本当に1つです。では教会の仕事に多くの時間をさき、それでもなお家庭を無視することのないようにするにはどうしたらいいでしょうか。そうです。家庭の夕べを開き、主のプログラムに自らを一致させることにより、家族とのだんらんや子供たちへの訓育の時を持つことができることを、私たちは保証されているのです。」

ユタ州プロボ市に住み、主婦であり、12人の子供の母親であり、YWMI A会長の責任を持つラニーブ・キンボール姉

妹は次のように語っている。「私は子供たちが学校から帰って来る時にいつも家にいることにしています。子供たちの話をすぐに聞けますから。スケジュールよりも態度の問題だと思います。主は導きを求める時にはいつでも助けてくださいます。私たちは個人的に主に助けと導きをお願いしてから1日を始めることにしています。」

キンボール姉妹はさらに続けて語っている。「家庭の夕べは欠かせません。末日聖徒として、また導きを与えてくれる予言者をいただく者として本当に祝福されているのを感じます。私は、まず神の王国を求めよというモルモン経の中の聖句を思い出しました。(ヤコブ2:18参照)これが価値観を高める時に福音を指針として用いる理由なのです。」

イリノイ州エバンストンに住む主婦で二児の母親であり、扶助協会の会長をしているルース・グローバー姉妹は、家庭の夕べの価値についての自分の経験を語ってくれた。彼女はノースウェスタン大学で当教会に関する講演を行なったが、その後で、人々の関心は彼女が講演中に紹介した家庭の夕べのテキストに集中したそうである。彼女はこう語っている。「今の世の中は、このような真に靈感を受けて作られたプログラムに飢えています。」

ブリティッシュコロンビアのバンクーバーに住む監督でインスティテュート教師のW・ポール・ハイドは次のような意見を述べている。彼は3人の子供の父親である。「妻は家庭の中心です。父親が仕事や教会の責任であまり家にいられない時、妻は子供の必要を満たすのに大きな役割を果たすことができます。」

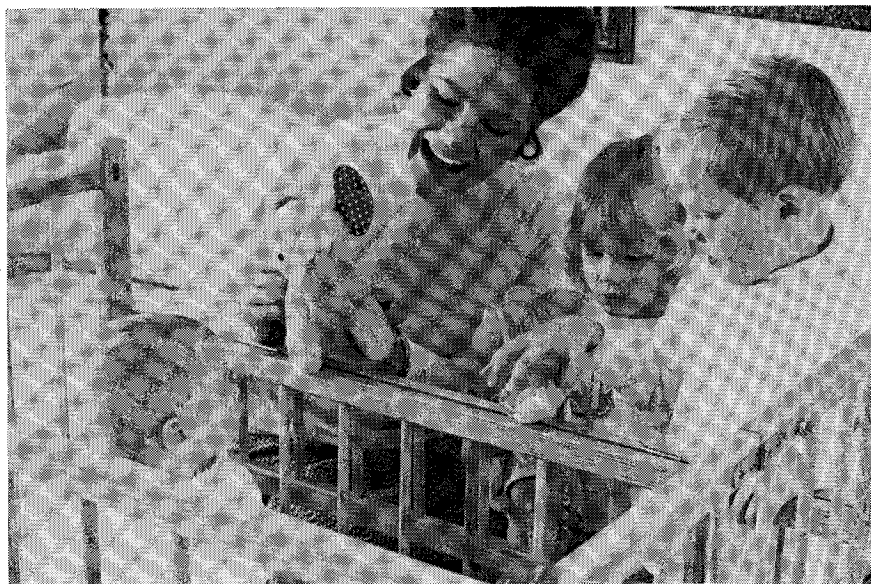
ある日私が出かけなければならなかった時、1人の子供がこう言いました。『パパ、きょうも出かけなきゃならないの?』そこで妻が言いました。『パパは神様の王国をつくるお助けをするために選ばれた人なのよ。うれしいでしょう。』このことは、私が口論をしたりせずに、霊的な気持で家を出ることができるので本当に助けになっています。」

両親の一致と協力は実に大切である。特に子供を教育したり、毎日の家族の問題を解決しようとする時にそれが言える。

物事の優先順位を決定する時、またいかに時間と方法を用いるかを決定する時、我々は次のデビッド・O・マッケイ大管長の有名な言葉を思い出さなければならないだろう。「いかなる成功も家庭の失敗をつぐなうことはできない。」

愛とは

クラーク・スウェイン



今まで幾世紀もの間、人々は愛のゆえに詩を作り、歌を口ずさみ、山に登り、戦いをしてきました。時には、愛の名のもとに人を殺し、自らの命を断つ人もいました。

しかし私たちは、愛について必ずしも常に正しい見方、考え方を示しているとは限りません。私たちがよくとるまちがった態度の1つは、愛を先祖から受け継いだ単なる不可解な感情または力と考えることです。ですから、愛がそのような人のもとに訪れた時、人は愛に「おぼれ」、自分を見失ってしまい、同様にそれが離れ去る時も、自らの力で止めることができないのです。

何カ月前でしょうか。1人の女性が私のところに相談にきました。話を聞きますと、彼女は夫と仲たがいをし、今妻子のある別の男性と恋をしているということでした。2人共今の相手と別れて再婚したがっているのです。双方共子供がいました。合わせて10人です。それでもなお別れようと思ってい

るのです。愛におぼれたためなのです。彼女は、夫への愛情を回復する方法を学ぶことが、恋人への愛を終結させることと同じようにどうすることもできないことだと思っていました。

ある男性は妻との離婚を考えていました。彼の言い分はこうです。「もう愛していないんです。」まるで自分の感情を変えるのに万策が尽きたような言い方です。このような人々は真の愛の意味を学ばなければなりません。愛が私たちを支配する不可解な力であるというような考えはやめなければなりません。必要なのは、愛を私たちの身のまわりに突然生ずるものとしてではなく、むしろ人々に接する方法として考えることです。そうすれば、自分で制御できるようになるでしょう。

愛は定義できないものだという人がいます。説明の不可能な、全く理解できないものだということです。しかし、このように考える人々は、愛が不可解なものであり、人が落ちる落とし穴だ

といった誤った考えを抱いている人々です。しかし愛が真に実在すると考える人は、愛を定義し、説明し、かつ理解することができます。

人と接する時にその人を自分の愛している人として考えることは助けになります。またその人を、愛を表現する能力のある人かそうでない人か考えるのも有効な方法です。結婚相手の中に見出さなければならぬ大切な要素の1つは、その人がどの程度まで愛を表現できるかということです。そして結婚の準備として欠かせない最も大切な特質の1つは愛を受けるのみならず、愛を与える能力なのです。

この能力は母親の腕にやさしく抱かれる幼少の頃から芽を出してきます。赤ん坊はいくらかわいがってもかわいがりすぎるといことはありません。しかし、あまり十分な愛を受けずに育った子供は、肉体的な成長においても人格形成の面においても遅れをとってしまいます。そのような子供はおそら

く感情面や身体面の病いにさいなまれるでしょう。

子供に十分な愛を与える理由は、子供が自己評価の能力、すなわち自分自身に対して感謝し、敬意を示し、愛する能力を伸ばすように助けるためです。そして自分への愛が深まれば深まるほど他の人へ愛を分つことができるようになるでしょう。

利己的な人は自分を愛する人ではありません。自分に対して消極的な感情を抱き、自己中心で、自分のことだけ考え、自己への疑いを克服しようとしている人なのです。戦場で戦っている人の心に平安はありません。心の中に葛藤があります。しかし、子供が自己愛を高めるように助けてあげれば、心の中の葛藤はなくなり、人に愛と親切を示すようになるのです。

愛している時は、いつもその人のことを考慮に入れているものです。そこに強制はありません。もちろん、おとなが子供に、子供の希望を退けて強制的に何かを行なわせることも必要でしょう。しかし互いに愛し合っている2人のおとなの間に強制はありません。私たちは自分の見解を人に理解してもらうように努めるでしょうし、また自分の確信することを人にも確信してもらいたいと思うでしょう。しかしこのような時でも、もし本当にその人を愛していれば強制しないはずで

愛している時は、人の愛によく応えるものです。ある人が他の人よりも人を愛する能力があるということから、

その人が他の人よりもよく人の愛に答えることができると結論づけることは理にかなったことです。しかし私たちは応え方を改善することを学ぶことができます。愛とは感情移入であり、人がどのように感じるかを理解することであり、自分の考えを人に知ってもらうことなのです。

愛している時は、相手の幸福や進歩に関心を抱くものです。関心を抱くだけではありません。自分を犠牲にしてまでその人のために何かをしようとします。愛することは与えることです。それは人に物を与えることです。しかもっと大切なことは、時間を与えることです。クリスマスの時ある父親が愛する息子に次のような手紙を書きました。「愛する息子へ：お父さんからのプレゼントは時間です。来年1年の間、1日1時間、お前にお父さんの時間をあげよう。」これこそ愛ある行ないではないでしょうか。

コリント人への第一の手紙第13章に愛についてパウロが説明した言葉がのっています。

愛している時は、長く耐え忍び人に親切にするものです。そのような愛は永続するものであり、ねたまず誇ることもしません。高ぶりや自慢、欺きは其の本意ではありません。愛する人は謙遜です。また不作法をしません。悪を思わず、すべてを耐え、すべてを忍び、めったに怒りません。また人に恨みを抱きません。人よりも自分の方が余計に傷つくことを知っているからです。

真の愛は、基本的にあらゆる人間関係において同じであると言えます。たとえば祖父と祖母、新婚夫婦、また母親と子供との関係がそうです。思いを寄せること、尊敬すること、応えること、感情移入をすること、関心を抱くこと、与えること、受け入れること、分ち合うこと、許すこと、これらはすべて愛に含まれるものです。これらの言葉がすべて行ないを伴った言葉であることにお気づきでしょうか。愛することは行ないを必要とするのです。

人に「あなたは私があげた愛をみんな握りつぶしてしまったわ」という人は、愛の技術を心得ていない人です。愛を握りつぶすことはできないからです。もし愛が消滅するとすれば、それは自殺ということになります。なぜなら愛は人がいかに愛されているかの尺度ではなく、いかに人を愛するかの尺度だからです。人を愛するか愛さないかを決めるのにその人の性格や態度をもとにすべきではありません。他の人よりもチャーミングで快活な、容姿端麗な人を愛することは簡単なことだと言えます。しかし私たちの愛は、他の人の性質や態度に影響されるべきではありません。愛は感情ではないのです。人と接する方法なのです。

スウェイン博士はモンタナ州立大学の結婚および家庭生活の准教授で、地方裁判所の結婚カウンセラーをしている人である。またヘレナスターキ部のポーズマンワード部ではヤングマリードの指導者として奉仕している。

選 択

ケネス・W・ゴドフレイ



ある日の夕方、事務所から家へ帰るなり、妻がドアのところ立って私を待ちうけていた。その顔には何かただならぬものが感じられる。奥に入って妻の話を聞くとそれは学校のフットボールチームのエンドをしている私共の次男のことだった。その彼が特別選手権試合を次の日の午後4時からに決めさせたという。

その日、毎週火曜日の午後4時とは、私の妻が管理するワード部の初等協会がある時間なのである。初等協会会長という職には責任が伴う。その中の1つは自ら模範を示すということである。もちろん家族も含めてである。

「デビッドは何をやりたいんだね。」すでにわかりきっていることを私は尋ねた。

「フットボールをやりたいのよ。」妻はそう言うと、確信しきった調子で言葉が続けた。「でもデビッドは初等協会に出なきゃならないわ。あなた話して下さいな。」

妻の固い決心と息子の自由意志の板ばさみにあい、とにかく私は息子の部屋に行って静かに話してみることにした。息子は初めおどおどしていたがやがて気持を和らげた。しかし私がフットボールの話を持ち出すと再び緊張の様子を示し始めた。

私は、まず彼がバプテスマの水をくぐった時に交わした約束のことから話を始めた。彼が聖典にそって次のように天父に語ったことを話したのである。「ぼくは心からイエス様のみ名を身に受け、イエス様が生活したように生活したいと思います。そうすればイエス様のところに行けるからです。それから、重荷を背負って困っている人を助け、悲しんでいる人には一緒に悲しんであげたいと思います。そして一生懸命教会の教えを守っていきたく思います。」

私は続けて、天父が教会の教えを守って生活することが簡単なことだとは決して言われなかったことを話した。障害や対立が起こらないということはなく、またむずかしい決定が全くないということでもない。逆に我々は我々の問題をイエス・キリストが解決されたような方法で解決しなければなら

ないのである。それから私は幾人かの有名なスポーツ選手の話をした。宗教上の理由から世界選手権試合を放棄した人たちのことである。ある人は日曜日に試合をすることを拒み、ある人は伝道に出るために競技者になる道を断念した。私はまた、チームへの責任上日曜日や他の宗教的行事のある日に試合を行ない、別の時にその埋め合わせをしようとしている人もいることをつけ加えた。現状を正直に伝えるためである。

そして私は言った。「もし私の提案が役に立つと思ったら、バプテスマの時の約束を思い出して祈ってみたらどうだね。お前が決められるんだ。そしたらお父さんもお母さんもお前の決定を尊重しよう。」

彼は長いこと部屋に入ったきりだった。そしてその晩の彼の祈りはいつもの祈りより幾分長めだったようである。私も彼が正しい決断を下すことができるように祈った。妻も私と全く同じことを祈っていた。なぜなら、その時の息子のおかれた状況が、初等協会会長うんぬんということより大切なことだったからである。

だれかが腕をゆすぶるのに目をさますと、あたりはもう明るかった。デビッドだった。

「ぼく、もう決めたよ。」

「どう決めたんだね。」私は尋ねた。

「試合に行く前30分と、試合が終わって家へ帰ってから30分、聖

典を読むよ。」

「いいだろう。」私がそう言うと彼は部屋を出て行った。私と妻はがっかりして何も言えなかった。

彼は、妻が担当の教師に欠席の理由を説明している間、新約聖書を読み、試合に行き、負けて家へ帰り、また聖書を読んだ。

しかし、それから数カ月過ぎたある日、彼は私にこう言ったのである。「お父さん。ぼくフットボールをやる日をまちがったと思う。お父さんの言うことが正しかったんだ。ぼく、お父さんがわかっているのにわざとぼくに選ばせてくれたことがうれしいんだ。今度からまちがわないうで決めるね。」

私は後に考えた。毎日の生活でバプテスマは一体どのような意味を持つのだろうか。アロン神権者にとって、神権の誓詞と誓約はどのような意味を持つのだろうか。教会と神権は、本当にスポーツやダンスなどの娯楽より大切なのだろうか。何を最初に考えるべきなのか。教会だろうか、それとも学校だろうか。教会とスポーツではどちらが優先するだろうか。教会と自分の兄弟姉妹ではどうだろうか。教会といろいろな楽しみごとではどうだろうか。

私は近頃、我々が人が思うよりもっと頻繁にむずかしい決定を下すように求められていることをはつきり知ることができた。善と悪、白と黒といった判断よりも、善と善または善でも悪でもないもの同

志の選択を迫られる場合が多いのである。また、天父がすべての問題を解決できるように常に明確な解答をお与え下さるとは限らない。そうではなく、天父が教えて下さるのはあらゆる問題に応用でき、かつ指針となる原則なのである。

さらに私は、人がバプテスマについて、また神権の誓詞と誓約についてどのような見方をするかによって困難な問題の解決方法にまた神権や教会員としての自分を考える時に差異が生じてくることを信じている。

神権や教会という言葉は、我々がそれらを神のものやキリストのものと同じように、自分のものとして考える時に、ある意味でより深いものとなる。これを行なう方法は、我々が真実であると判断する源泉に常に接し犠牲を捧げることである。

神権は子供を祝福する時、聖餐を祝福し配る時、病人を癒す時、教師を任命する時、そしてホーム・ティーチングをする時に意味深いものとなる。ハロルド・B・リー大管長は迷える者が道を見出すのを助ける時、神権はさらに大いなるものとなると語っている。このように、我々には完全な献身と参加とが勧告されている。なぜなら、そのようにしてこそ教会を自らのものとすることができるからである。

小さな友だちへ



ロバート・L・シンプソン

私は子供たちが神様を信じているということを聞くと、いつもなんと神様は私たちの近くにいらっしゃるのだらうと思います。

また子供たちのお祈りは、天のおとう様は私たちが長いお祈りをしたりもったいぶった言葉を使うのを望んでいないということを私に教えてくれます。私の孫のリサは長いお祈りはしませんし、すばらしい言葉も使いません。でも私はリサのお祈りは神様に聞きとどけられ、神様はそれに答えて下さっていると思います。なぜならリサは天のおとう様を愛しているし天のおとう様もリサを愛していらっしゃるからです。

私が6才の時に、おかあさんはカリフォルニアのサンタ・モニタに建てられる新しい教会のくわ入れ式に私を連れて行ってくれました。私たちが着いたとき、おかあさんは私が家族と海へ行く時たいてい持っていった小さなシャベルを持ってきていたのに気がつきました。私は礼拝堂の敷地のどこかを掘るのを手伝うことができた

いいなあと願っていました。その最初の日に私は自分のシャベルを使って地面を掘らせてもらいました。私は天のおとう様のための教会を建てるのを手伝うことができたので、私の信仰はあつくなりました。なんていい気持ちだったことでしょう。私の心に奉仕と信仰の種がうえつけられました。私は6才の時に持っていたこの信仰と奉仕したいという気持ちをずっと持ちつづけていきたいと思えます。

伝道に出たいという私の子供のころの夢はその後実現されました。私は遠くニュージーランドへ召されました。そこで私は最初にマオリ族の人々に会いました。素朴で真心があって強い信仰を持った彼らは、とても私にうちとけてくれました。

私の最初の任務の1つはジュディアと呼ばれるマオリ部落へ行くことでした。そこでは宣教師は小さな礼拝堂の建物の中で人々を教えていました。そこにいた時、私

はマオリ語を学ぶことにしました。毎日私は天のおとう様に助けてくださるようにお祈りしました。するとある日私はプライマリーの子供たちに囲まれているのに気がついて驚きました。新しい国語を学ぶのを助けて下さいという私の祈りは聞きとどけられていたのです。そして天のおとう様は私を助けるためにこれらの子供たちを私のところへ送るように、支部長に靈感を与えていたのです。彼らは何週間もの間どこにでもついて来てマオリ語で話しかけました。私は彼らが最初に教えてくれたこの歌をいつまでも忘れることはできません。

ヘイ テイト テイト テ ヌ
ゲルメテ

フィロ

テ カウ ペケ ルンガ テ

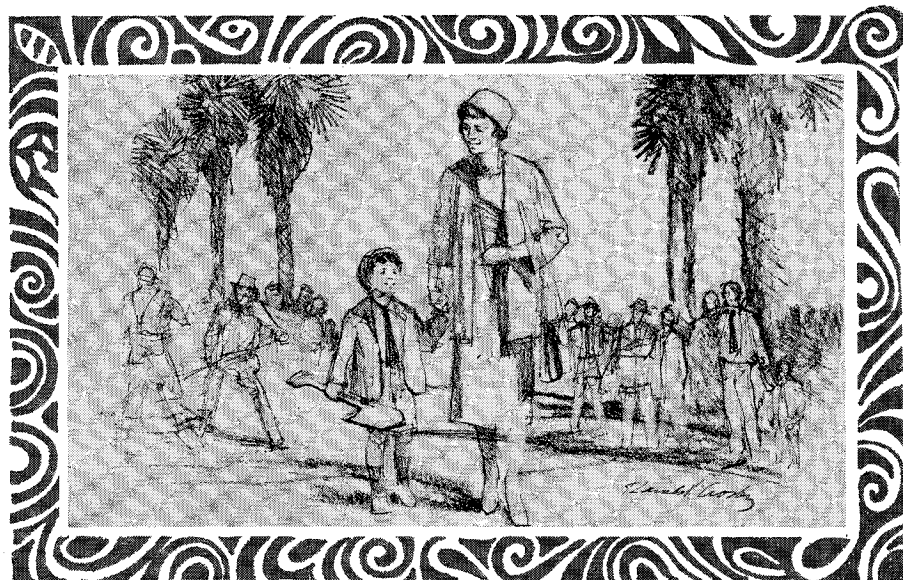
マラマ

カ カタ テ クリ キ タナ

マヒ

パイ

カ オマ テリヒ メト プヌ





その言葉は美しいひびきを持っています。でも新しい宣教師である私には意味がわかりませんでした。私はそれは古いマオリ族の戦いの歌だと思いました。私は子供たちからその意味を教えてもらって驚きました。

「えい、やっつけろ、やっつけろ、ねことバイオリンを。牛は月を飛びこえた」……¹

私は新しい宣教師にすばらしい祝福を与えてくれたニュージーランドの子供達にいつもとても感謝しています。

ニュージーランドの別のところでは宣教師は毎晩、あるマオリ族の家に泊まりました。そこではゆっくり寝ることができました。そしていつもそこに天のおとう様のみたまがあることを知っていました。この家族には11人の子供がいました。そしてみんながこうたいで家族のお祈りをしました。子供たちはこの世でもまた永遠でも神権の力によって一しょに住むために、いつか神殿に行くことができるようにいつも心から祈りました。この家族はとても貧しかったのでおかあさんのために切符を買

えそうもありませんでした。おとうさんと11人の子供たちは8千キロ離れたハワイ神殿にはるばる旅行しました。しかしこの家族の信仰は強く、家族全員のお祈りがかかすことはありませんでした。そのような祝福はどうして得られたのでしょうか。2、3年後にデビッド・O・マッケイ大管長はニュージーランドに、ハワイへ旅行するのに十分なお金がどうしてもない小さなマオリ族のいるところから80キロの範囲以内に新しい神殿を建てると発表した時、ニュージーランドにいた全部の宣教師は言葉に言い表わせないほど謙そんになりました。神様は不思議な方法で偉大なみわざをなさいます。強い信仰をもつ人々は必ず天の祝福を受けることができます。

私たちの家族は、自分の家で家庭の夕べを開いてほしいと招待してくれた小さな友だちのベッキーを忘れることはないでしょう。たとえ彼女のおとうさんが教会の会員でないとしても、彼女はおとうさんも家庭の夕べをともにしてほ



しかったのです。彼女は心からおとうさんに教会の会員になってほしいと思いました。

ベッキーのおとうさんは私たちが家庭の夕べに行くことを喜んでくれました。私たちは一しょに楽しく過ごしました。軽い食事やゲームや家族の祈りによって霊的なレッスンは続けられました。私たちがおやすみなさいと言った時、ベッキーは私を見上げて、「シンプソン監督、私のお願いを聞いて下さいますか」とたずねました。

「もちろん」と私は答えました。

「何でも言ってごらん。」

「私のために私のおとうさんにバプテスマを施して下さいませんか。」

子供の希望と信仰に満ちたそのたのみは、おとうさんの心を強くうちました。そして2、3週間後おとうさんはバプテスマを受けました。イエスがこう言われたのも当然なことです。「よく聞きなさい。心を入れかえて幼な子のようにならなければ、天国に入ることはできないであろう。」(マタイ 18:3)

1. イギリスの子守歌

彼はすぐに監督の家へ行き、さっき起きたことを話しました。「インディアンはほんとうに助けが必要なんです。そして彼らはぼくがだれかを連れてもどるまでエライジャを人質にしています。」トミーはきっぱりとそう言いました。

マーレイ監督は、静かにトミーの言うことを聞いていました。それから彼はどうしたらよいかと考えながらトミーをなぐさめるように肩をだきました。「ブリガム・ヤング大管長を見つけなければならぬ。」彼はそう決心しました。

「彼は渡し場にいるかもしれない。君は私の馬に乗ってできるだけ早くそこへ行ってほしい。その間に私はこのへんをさがしてみよう。」

渡し場はそこから19キロ離れていたものでトミーはそこまで行くのに1時間かかりました。彼はそこに着くとブリガム・ヤングがいるのを見つけて、さっきの出来事を話しました。

「もちろん、インディアンを助けよう。でもまずエライジャのことが心配だ。君はできるだけ早く彼のところへもどらなくてはいけない。君の荷馬車とマーレイ監督の荷馬車を引いて行きなさい。この2つの荷馬車はそのひどい傷を負った人をウィンター・クォーターズに運んで来るのに十分だろう。私の家で会おう。」

マーレイ監督はトミーを待っていました。彼らは2台の荷馬車を引いてエライジャとインディアンを引き取りに行きました。

彼らが小さなさびしいキャンプに来た時、エライジャは走って来てトミーに話し始めました。「まず第一にインディアンはぼくが逃げるんじゃないかってこわがっていたよ。でもぼくがシャツをぬいでそれを小川の水にぬらしてそれでビッグ・ヘッド酋長の頭を冷やしてあげたら、ぼくを信用してくれた」とエライジャが言いました。

「無事でよかった。」トミーが言いました。

マーレイ監督と若いインディアンはビッグ・ヘッド酋長をトミーの馬車の中に連れて行きました。それでトミーはウィンター・クォーターズにもどり始めました。ひどいけがをしたばかりのインディアンはマーレイ監督の荷馬車に入れられました。残りのインディアンは荷馬車のわきを歩いて行きました。

荷馬車がブリガム・ヤングの家に着いた時、まさに日が沈もうとしていました。彼はまもなく、インディアンの酋長はとてもひどいけがをしているので手厚い看護が必要だとわかりました。彼はトミーの方にふり向いてこのように言いました。「おかあさんのところへ行って、ビッグ・ヘッドを家の中に入れて、彼がよくなるまで彼の看病をしてくれるよう言っ来てくれないだろうか。」

トミーはそれを聞くとまたたく間にいなくなりました。彼は2、3分後おかあさんともどって来ました。おかあさんは「もちろん、私は彼のお世話をしますわ」と言いました。



ブリガム・ヤングはほほえみながら言いました。「あなたは悲しむことはありません。インディアンは親切にもらったことは決して忘れない人たちです。」

何週間もトミーとおかあさんには心配な日々が続きました。ビッグ・ヘッドの病気はとても重く、かたときも目を離すことはできませんでした。トミーとおかあさんはどちらもつきっきりで彼の看病をしました。そしてある日急に、ビッグ・ヘッドはベッドから起き出しました。「私、ビッグ・ヘッドはよくなった、これから部族のところへ行かなければならない。」

その夜彼はそこにとどまっていたインディアン全部を連れてウィンター・クォーターズを去りました。

こんなことがあってからある時、トミーははれ物ができてひどい病気になりました。おかあさんはよくなるかも知れないかと思っても心配しました。ところが思いがけなくビッグ・ヘッド酋長がトミーの家の戸口のところに来て、トミーのおかあさんにセイヨウワサビをさしだしました。「これをせんで子供に飲ませなさい。子供、よくなる。」お礼の言葉も待たずに、インディアンは向きをかえると、もときた道をひき返し、まもなく姿が見えなくなりました。

セイヨウワサビのおかげで、トミーのはれ物はなおりました。その後、はれ物ができてひどいかっこうになったたくさんの人々に、セイヨウワサビが与えられました。そしてその人たちも命を救われました。

「おかあさん、ビッグ・ヘッド酋長は恩を忘れなかったんだね。」とトミーはある日たずねました。

おかあさんはこたえました。「そうよ、トミー。私たちが決して忘れないわ。」

ニュージーランドから来た
ヒラリーちゃん



いかにして証を得、 持ち続けるか



ロバート・L・シンプソン

「ジョセフ・スミスは夢想的な少年であって、幻覚のとりこになったのだ。彼の話には真実はない。」これが中学に通っていた頃親友の1人が私に語った言葉です。

彼の意見は、その前に交わした宗教についての会話に対する反応として発せられたのです。その時私は彼に最初の示現の話詳しく語りました。友人は両親から与えられた図書館の参考書で彼の意見を証明してみせました。物事は黒白それぞれの面があり、公立図書館と同様です。たしかに13才の少年の精神にとって、公立図書館にまさる信ずべきより所はなかったことでしょう。

まるで今まで愛し信じてきたすべてが危機にひんしたようでした。ほんの2年前小学生の時にはとても単純でした。教師たちは良い人たちでしたし、私は彼らの教えることを完全に受け入れておりました。今まで私にとって極めて安全に、きちんとしてあったものが、突然攻撃にさらされたのです。

遅かれ早かれ、こういった瞬間は末日聖徒すべてにやってくる。子供の時の信仰と、他人の言葉に無条件に信頼を寄せた日が色あせ、回復されたイエス・キリストの福音が生きているかどうかという自分自身の確信についてとって代わられるのです。

ブリガム・ヤング大管長の副管長ヒーバー・C・キンボールは、教会が重要な社会的論争で、また基本的な教義ですらも攻撃を受ける日が来ることを予知していました。彼は教会の個々の会員にこう語りました。

「……来たるべき困難に直面してあなた方自身でこの業が真実であるという知識をもつことが必要であろう。その困難とは自身の知識や証をもたない男女が転落するといった性質のものである。……だれしものが借りものの光では存在し得なくなる時が来るであろう。あなた方おのおのが内なる光明によって導かれなくてはなるまい。もしそれをもたざるならば、いかに存在し得るであろうか。」(オルソン・F・ホイットニー著「ヒーバー・C・キンボールの生涯」P.450)

2, 3年前非常に勢いがあった「神は死んだ」という言葉に対する反動として、全世界的に神についての探究が巻き返されているように思われます。伝統的に教会では十代や若い成人のパプテスマが他の年齢層よりも多くなっていますが、最近ではこの傾向がもっと著しくなっています。時によって

は、新しく改宗した人びとは、生れた時からずっと教会の会員であって、人生で最も緊急を要する事柄をあたりまえのこととして考えている大勢の若い人たちよりも教会についてもっとよく知っており、より強い証をのぼしています。

この偉大な末日の堅固で変わらぬ証は、ワード部の監督会や大祭司たちの手で備えられるものではありません。真実の証はそれを築き上げるために努力する人々に神から与えられるのです。14才の少年が十分な理由があってこの天からの賜物を開くために選ばれました。彼の心はまだ固まっていませんでした。彼はよく教えを聞く少年でした。彼は若くて信仰心がありました。子供時代の信仰、それは成長するにつれてあまりにもしばしば、懐疑や疑いの生活によって置き去りにされてしまうのですが、彼はその信仰を保っていました。私はこう考えます。若い精神と心は証の種をまき、根をはらせ育てるための肥沃な土地となるのです。

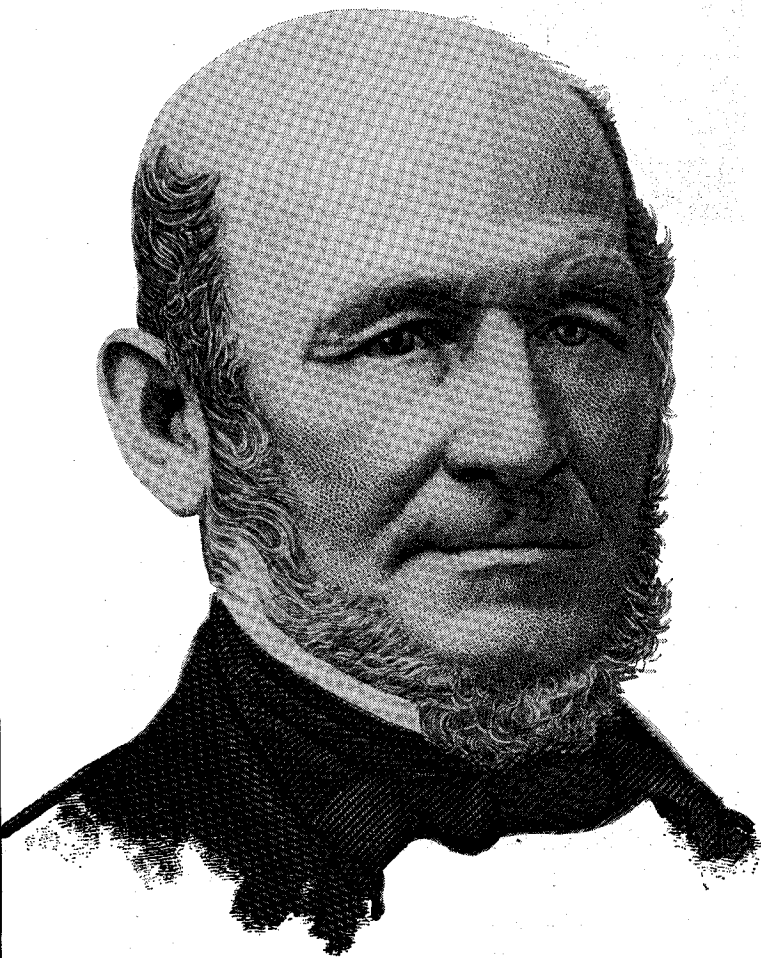
証への探究は、ジョセフ・スミスの話が真実であるかどうか、モルモン経が靈感による書物であるかどうか、またこの教会が予言者によって導かれたものかどうかということがその人にとって重大な関心事になる時にのみ始まります。こうしてのみ人は光明と真実の賓客となることができます。しかし、証を得て保つには努力が要求されます。強い望みと、勉学と、正しく生きるために必要な自己規制がなくては、質問に対する解答は来そうにもありません。

私が十代の時は、いつも話し合っている若者たちと全く同じようでした。彼らはしばしば「もし神がはっきりと知らせてくれさえすれば、たしかに私は喜んで全生涯をその業のために捧げるのだが」と言います。しかし奇蹟の上だけに建てられた証は極めて浅いものであって、他の奇蹟がなければそれを永続させることはできません。懐疑論者にとってこのようなものは、ヒーバー・C・キンボールが話したような「障害に対抗するための最良の証を得る永遠の方法」ではありません。

デビッド・O・マッケイ大管長でさえも十代の少年の時、この精神的な過程を経たのです。彼は少年の時ユタ州ハンツビルで一度だけこの業の真実さを試すために茂みのかたわらでひざまずいたことがあると語っています。

マッケイ大管長のその時の言葉を引用させていただきます。

「私は魂のすべてを神に注ぎ、情熱のすべてをかけてひざ



「……来たるべき困難に直面してあなた方自身でこの業が真実であるという知識をもつことが必要であろう。その困難とは自身の知識や証をもたない男女が転落するといった性質のものである。……だれしもが借りものの光では存在し得なくなる時が来るであろう。あなた方おのおのが内なる光明によって導かれなくてはなるまい。もしそれをもたないならば、いかにして存在し得るであろうか。」

についてあかしするものである。」(ヨハネ5:39)

私が聖典についての知識の深さに感嘆する1人のすばらしい兄弟が、ある日モルモン経について論じておりました。ある人が、どうすれば彼が持っているような聖典についての知識を容易に獲得することができるのだろうかとたずねました。

彼の答えは模範的でした。「なぜ？ それは簡単です。」彼はこう説明しました。「第1ページから始め、2ページに進みさらに次に進みなさい。」第1ページから始めようとする人はごく少ないのです。私は力説します。永遠の生命への近道はない。福音の原則を学ぶには、私たちは第1ページから始めなければなりません。それから第2ページへと進み、希望を持って完全な知識を得るまで努力するのです。

私たちが学ぶ聖典について、イエス・キリストの福音は本筋を外れないものであることを覚えておく必要があります。みなさんもご承知のように、人間は聖典をその場その時の便宜に適応させ、おそらくは一時的な都合に合うように絶えず合理化しようとし続けて来た。しかし主は末日の啓示の中で言っておられます。「これらの誠命をしらべよ。そはこれらは真実確かなる誠命にして……。われ言いたる事は、われ言いたるなり。われ言い逃れせず。」主はあらゆる若き末日聖徒が指針とすべき注意で結んでおられます。「……わが声にて言われるも、僕らの声にて言われるもみな一つなり。」(教義と聖約1:37-38) わたしたちが日々生きた予言者の導きを受ける機会があるのは、何と頼もしいことではありませんか。

「イエスは彼らに答えていわれた。『わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされた方の教である。

神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それともわたし自身から出たものか、わかるであろう。』(ヨハネ7:16-17)

伝道に出た宣教師はその生活に飛び込みすっかりひたりきる決意をした時にだけ喜びと成功とを味わうことができるでしょう。世界中の若者たちが何らかの方法で「幸福」を経験したいと願っています。最近私はデゼルト産業で身体障害者

まずいてこの福音の証を請い求めた。なにかの現われがあるだろう、私を疑いから完全に抜け出させてくれるなんらかの変化があるはずだと心に思った。

起き上がり馬に乗った。道をたどりながら自分の心の中をのぞき込むようにして、知らず知らずのうちに首を振っていた。ちがう。何の変化もない。私はひざまずく前とまったく同じ少年だ。予想していた示現は来なかったのだ。

しかしながら、それは私が予期したとは違う方法でやって来た。『神の力の現われと天使の出現すらあったが、それがついに来た時、それは単に確信であった。証拠ではなかった。』(「人生の宝」P. 229-30)

天父と共に生きる永遠の生命への近道はありません。知識と証は「規則に規則を加え、誠命にいましめを加えて」(教義と聖約98:12) 後に来るに違いありません。救い主は「聖典をさがせ」といわれ、そこで聖典が教えてくれる永遠の生命について述べ次のように結んでおられます。「……わたし

「神の力の現われと天使の出現すらあったが、それがついに来た時、それは単に確信であった。証拠ではなかった。」



である従業員たちと並んで特別の目的で働き、幸福の経験をしたカルフォルニアの高校生のグループに会いました。1人の青年が「私はもう前と同じではない」と言いました。

夏休みの間オーストラリアの執事定員会が彼らの新しい集会場の建築に皆志願して出ることを決めました。彼らは今でもそれを自分たちの集会場と言っています。ソルトレーク市のローレルのクラスは、夏の間の志願奉仕に近くの病院を選びました。彼女たちは延べ600時間を他の人々のために捧げました。夏の終りの祈り会の時、1人の少女が言いました。「それは地上の天国のようでした」と。

そして、ユタ州のローガンの監督の青少年委員会は、ある未亡人の家を修理することを決めました。1人の青年が述べました。「私は彼女が泣くのを見た時、即座にまことの幸福への鍵について気づいたのです。」少女が述べました。「今まで私は教師が教えてくれた『父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは……（ヤコブ1：27）』の真の意味を少しも知りませんでした」と。

主のみこころをなす時、みたまの賜を通して証の快い確信を得た世界各地の若者たちについての例が、教会には幾百となくあります。学ぶだけでは十分ではありません。自分自身の行動を通じてそれを取り入れなければなりません。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」

そして聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかをあなたたちに解る。」（モロナイ10：4-5）

聖句それ自体が人々を他のいかなる激励や励ましよりも多くモルモン経への証に導きました。断食と祈りとはすべての予言者によって魂を強め、天父とのより良い交わりを得るために用いられた手段です。彼らは皆そのようにして私たちを激励しました。

すべての末日聖徒は自分で確固とした証……イエスがキリ

ストであり、生きています神の御子であり、ジョセフ・スミスが予言者であり、彼を通じて福音が回復され、末日聖徒イエス・キリスト教会は「……全地の面に於ける唯一の真にして生命あり……。」（教義と聖約1：30）……を得なければなりません。

だれでもが主の確立したもうた証への手順に従って証を獲得することができます。近道はありません。知ろうとする意欲が絶対不可欠です。まず教義を学ぶことです。主のみ心をなすことです。あなたの心に清い教えがもたらされるでしょう。たびたび祈ることで道が開かれ、すべてが主を通して可能となるでしょう。主は言うておられます。「……わたしから離れては、あなた方は何一つ出来ない。」（ヨハネ15：5）

あなたがたの1人1人が自身の証を確立し続けることができますように、借りものの光は将来の出来事に直面した時、十分ではないのですから。

いかに礼拝すべきか

七十人最高評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

私は正しい礼拝のしかたについて平易で、はっきりした助言をしたいと思う。礼拝のしかたについては多分世界中の他のどの分野に於ける事柄についてより以上に多くの間違っただけや誤りがある。しかしながら我々がそれをどの様にして礼拝すべきかと言うことより大切なことは他にない。

主が人類を創造され、そして彼らを地上に置かれた時、主は彼らに唯一の生けるまことの神である主を愛し、主に仕えること、そして主は彼らが礼拝すべき唯一のものであるという戒めを与えられた。(教義と聖約20:19)

イエスは、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」(ルカ伝4:8)と言われ、このことがすべての戒めの中で最も基本的なものであることを確認された。そしてすべての時代のすべての予言者たちの不断の叫びは、「さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみ前にひざまずこう。主はわれらの神であり、われらはその牧の民、そのみ手の羊である。」(詩篇95:6-7)ということなのである。

永遠の父の霊の子として、我々は主の戒めを守るかどうか、そして主のみ前に帰り、主の様になるのに価する行ないをするかどうかの試しを受けるために地上に送られたのである。

また主は我々の心に礼拝をし、救いを求め、権力や我々より偉大なものを愛し、それに仕えたいという本能的な欲求をうえつけた。礼拝は絶対的なものである。

問題は人々が礼拝するかどうかではなく、だれが、または何が彼らの信仰の対象となるかであり、そしていかにして彼らの神を信仰する様になるかということである。

ヤコブの井戸でサマリヤの女がイエスに次の様に語った。「私達の先祖はこの山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」これに対して主は次のように答えておられる。「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。なぜなら、神はそのような者たちにそのみたまを約束されたからである。そして父を礼拝する者たちは霊とまこととをもって礼拝すべき

である。」(靈感訳ヨハネ4:22-26)

この様に我々の目的はまことの生ける神を礼拝することであり、そしてそれをみたまの力と神が定めた方法で行なうことである。まことの神への認められた礼拝は我々を救いへと導いてくれる。いつわりの神々への信仰や永遠の真実に基づかない信仰はその様な保証をしてはくれない。

まことの知識は本当の礼拝にとって必要欠くべからざるものである。我々は神が我々の父であり、その姿に似せて我々がつくられた最も高貴で完全な方であり、人類の罪のあがないのために最愛の息子をこの世にお送りになり、救いはキリストにおいてなされ、そしてキリストはこの世に対する神の啓示であり、またキリストとその霊の律法はこの世において彼を代表する予言者と十二使徒に与えられる啓示によってのみ知られるということも学ばなければならない。

いつわりの神を礼拝しても救いはない。ある人がたとえいかに誠実にまた真剣に神は黄金の子牛であると信じて、あるいは神は実体のないものであり、すべてのものの中に存在する力であると信じたとしても、それは本当の礼拝とは何の関係もないのである。その様なものや、あるいはそのような概念を礼拝することには救いの力はな

い。ある人々は偶像や権力やまた法律が神だと心から信ずるかもしれないが、このような考えに対するいかなる量の信仰も不滅や永遠の生命へと導く力を決して与えはしないであろう。

もしある人が牛かワニを礼拝するならば、彼はその牛やワニがたまたまちょうど良い時期に配るめぐみを受けるかもしれない。しかしそれは永遠の報いではないのである。

もし人が宇宙の律法や自然の力を礼拝するとしても、地球は回転し続け、太陽は輝き続け、そして雨は正しい人々の上にも、また不正の人々の上にも降ることは疑いのないところである。

しかしもし彼がみたまと真実とをもってまことの生ける神を礼拝するならば全能の神は聖霊をお与えになり、その人は死者を復活させ、山を動かし、天使の訪問を受け、そして天の道を歩む力を受けるであろう。

さてそれでは生きて支配し、そして実在する神にいかにか我々の信仰を捧げるべきかについてみてみよう。まことの礼拝についての鍵は1833年にジョセフ・スミスに与えられた啓示に含まれている。その中で主は新たに昔の十二使徒の証を語られた。

この記録は、キリストが始めは神と共にましまし、世の贖い主、世の光と命、そして父なる神の独り子としてこの世に降臨して肉体を受けられた方であり、しかも「最初に完きを受けずして恩恵に恩恵を加えられ」て御父の完き栄光を受け、また「天地両つながらに於けるあらゆる権能を受け」られたので、「御父の栄光」が共にあることを証明している。

それから主は言われた。「われこれらのことばを汝らに告ぐるは、汝らわが言うところを聞いて礼拝の方法を覚りて知り、礼拝するものを知り、かくしてわが名によりて御父に來り、而して時至りて御父の完きを受けんがためなり。

もし汝らわが誠命を守らば、御父の完きを受け、わが御父に於ける如く、汝らわれにありて榮を得べし。この故に汝らに告ぐ、汝ら恩恵に恩恵を加えられるべし、と。」(教義と聖約93:19-20)

言い換えるならば、真実の完全な礼拝は神の子イエスの足跡をたどることにあり、神の戒めを守り、さらにキリストが神においてそうあられた様に我々が恩恵について恩恵を受け、ついにキリストにおいて栄光を受けるように神の意志に従うことにあるのである。

それは単なる祈りや、説教や、讚美歌をはるかに超えたものである。それは生活することであり、行なうことであり、そして従うことである。それはまた偉大な模範であるイエスにならうことにほかならない。

この原則とともに神にとって好ましい神聖な礼拝を1つ1つ説明しよう。

主を礼拝することは主に従うことであり、主の面を見ることであり、教義を信ずることであり、主の思いをおしはかることである。

それは主の道を歩むことであり、キリストがなされたようにバプテスマを受けることであり、神の言われた王国の福音を説くことであり、主が行なわれたように病める者を勇気づけ、死者を復活させることである。

主を礼拝することは、最初に我々の生命に主の王国のものを入れることであり、神の口から出る一つ一つの言葉で生き、我々の心をキリストとキリストによりもたらされる救いに合わせることである。

それは主が光にあるように光の中を歩むことであり、主の望まれるままにまた主がなされるであろうように物事をなすことである。そして主のごとくなることである。

主を礼拝することは聖霊と共に歩むことであり、肉欲を超越することであり、情欲をおさえることであり、そし

て(イエスのように)世に勝つことである。

それは百分の一を払い、捧げ物をすることであり、我々に保護を託されたものを保護する時に、賢い執事の役目を果たすことであり、我々の才能と富とをもって真理を広め、主の王国を築くことである。

主を礼拝することは神殿で結婚することであり、子供を持つことであり、子供に福音を伝えることであり、そして彼らを光明と真理の中で育てることである。

それは家族の単位を完成させることであり、父母を敬うことであり、真心をもって妻を愛し他のなにものにも固執しないことである。主を礼拝することは未亡人の家族を困っている時に訪問し、さらに我々自身を世の汚れから守ることである。

それは福祉の業を行なうことであり病める人々に癒しの儀式を行なうことであり、伝道に行くことであり、ホーム・ティーチングに行き、また家庭の夕べを開くことである。

主を礼拝することは福音を学び、光と真実とを貯え、神の王国の物事を我々の心で考え、それらを我々の生活の一部にすることである。

それは誠心誠意祈ることであり、聖霊の力によって説教することであり、感謝と賛美の歌を歌うことである。

主を礼拝することは働くことであり、つとめて善き業に従い、神のなせることに従事することであり、そして我々の仲間を愛し、奉仕することである。

それはうえた人々に食を与えることであり、裸の者に服を与えることであり、悲しむ人をなぐさめることであり、人々を奮いたたせ、弱いひざを強くすることである。

主を礼拝することは真実と正義のために勇敢に立つことであり、我々の良き影響を市民、文化、教育、政治の分

野に与え、そしてこの世(地上の)における神の目的をさらに促進させる主の律法や主義を支持することである。

主を礼拝することは元気を出し、勇気を持ち、勇敢であり、神より与えられた罪の意識を持つ勇気を持つことでありそして信仰を持つことである。

それは1万を1万倍することである。それは神の戒めを守ることである。それはすべての福音のすべての律法に生きることである。

主を礼拝することは神から「あなたを私と同じにしてあげよう」と言う祝福された保証を得るまでキリストと同じようであることである。

これらは完全な主義なのである。我々が心の中でそれらを良く考える時、きっとますますその真実性を理解するであろうと思う。

真実で完全な礼拝は実は人間の最高の仕事であり、また目的でもある。神は我々が我々のたましいに炎のペン

で、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」(ルカ4:8)

と言う主イエスの命令を書くことを認め、また我々は実際に、そして行動を通して霊とまことをもって主を礼拝すること、そしてそれによって現世の生命、さらに来たるべき神の国の永遠の生命に平安を得ることをお認めになるのである。

主イエス・キリストのみ名により、
アーメン。

——第141回半期総大会における説教より——

教師とは

七十人最高評議員会会員

ポール・H・ダン

兄弟姉妹、我々はこの偉大な大会で学ぶところのものが大いにあった。そして私は教えるということと偉大な教師についてよく考えてきた。昨夜マリオン・D・ハンクス長老は、人の心に深い影響を与えて亡くなったいとこの〔アイバン〕フレーム兄弟について話し、私たちの注目をひいた。彼の葬儀に際して捧げられた大いなる賞賛の1つは、すべての少年が彼の人生を模範にすべきだということであったと長老は述べた。

私はそのことについて考えた。そして私の人生の中に彼のような人がいることについて再度神に感謝した。

彼は78才で、人生の過渡期にあり将来を囑望される我々6人の祭司の指導教師であった。名前をチャールズ・B・スチュワートといった。彼の息子が今日ここに偉大なタバナクル聖歌隊隊長

として来ておられる。

私はあなた方が16才の時に78才の老人をどのように考えるかはわからないが、私たちは彼が文字通りモーセの再来のようであると思ったので、この監督の知恵に対して疑問を抱いたのである。

ハリウッドワード部の今にも倒れそうな古い2階のクラスに初めて出席した日のことを私は覚えている。そこであの親切でやさしい人が私を迎えてくれたのである。彼は他の少年たちにもしたように、私の手をとって言った。

「君はハロルド・ダンの息子だね」

「はい、そうです」

彼は少しばかり私と私の家族について話し、私について大きな個人的興味を示した。それから彼はこう語った。

「ポール、このクラスのメンバーにな

るための資格の1つは、毎日1つ人生に役立つ言葉を覚えることだ。何か覚えているかね。」

さて私は何年もそのようなことなど考えてみたことはなかった。彼は私を知ってこう言った。「1つ教えて上げよう。注意して聞きなさい。『注意は記憶の母である。』さあ復唱してごらん。」そこで私は繰り返し、完全に復唱できた。彼は私にクラスに入ることを許してくれた。

すばらしいクラスであった。それが終り私が去ろうとした時、彼がまた言った。「君にいうのを忘れていた。家へ帰る前に君はもう1つ新しい言葉を言わなければならないのだよ。」

「家へ帰るのはよそう。もう何も思いつかない。」私はそう思った。そこで彼は言った。

「さあ、よく注意して聞きなさい。私

が1つ教えるからいつも覚えておくんだよ。『偽りをしようとする時、私たちはなんともつれた布を織ることだろう』私はこの言葉を決して忘れはしない。」

1週間たち、我々は同じような経験をした。私は依然として新しい言葉が考えつかなかった。彼は言った。「よく気をつけて聞きなさい。『私たちの責任を鼓舞し、罪を警告するためにいつもささやきかける奇妙な小さな声がある。不思議なことにそれは音を出さなくても言葉を話すわけでもないのに、ひとりで聞こえてくるのだ。』」この言葉を私は決して忘れない。

私は家へ帰りかけたが、私が他の言葉を引用しない限り彼は家へ帰してくれないことに気づいた。だまっている私に彼はこう言った。「よく聞きなさい。『賢い年とったふくろうがかしの木に座っていた。長く座っていればいるほどしゃべらなくなった。しゃべらなくなればなるほど、彼は聞いた』ポールよ、君はこの賢い年とったふくろうのようになれるんじゃないだろうか。」

このことを私はずっと考えていた。また1週間がたち、もう1つの偉大な言葉を学んだ。「若者よ、覚えておきなさい。手本というものは、人に借りたと思わせる柔和な光を注ぐ。だからきょうはまず自分自身を進歩させなさい。それからあすはあなたの友人を。」私はこの言葉も忘れることはない。

時は惜しみなく流れる。2年の後、私は国を守るための戦闘部隊の中に入った。私は沖繩島にいたのである。そこでステュワート夫人からの便りに接し私の親切な友人であり助言者であった人の死去を知らされた。その手紙の中にステュワート兄弟から私へあてた書きかけの手紙が同封してあった。

彼はこう書いている。「愛するポールよ、はるか離れた国にいて、勇気を

失い、意気消沈しているであろう君のことをいつも思っています。そこで君の精神を確立するために珠玉のような言葉を紹介しましょう。」そこにはまだ聞いたことのない25の言葉が書かれていた。私は、それらを決して忘れない。

我々のことを心配してくれる人、フレイルムやステュワートのような人について神に感謝を捧げる。それ以来私は善に向かって私に影響を与えてくれたこのような教師たちを5人も数えることができる。ハンクス長老の話に私は共感を覚える。あらゆる少年たちの人生に、ステュワート兄弟とフレイルム兄弟がいるべきなのである。

教師とは何か。教師は予言者である。明日への基礎を置く人である。

教師は芸術家である。彼は貴重な人間に個性の花を開かせる。

教師は友人である。彼は自分の生徒たちの信頼と献身に答える。

教師は市民である。彼は社会の進歩のために選ばれ認可されている。

教師は通訳である。彼は自身の円熟した広い生活を通じて若者を案内しようとしてつとめる。

教師は建築家である。彼は文明のより高く秀れた価値を目ざして働く。

教師は教養の担い手である。彼はより価値のある趣味、分別のある態度、優雅なマナー、より高い知性へと導く。

教師は立案者である。彼は彼の前にある若者たちの人生を、正義の光の中でより強く成長していく偉大な体系の一部と見る。

教師は開拓者である。彼は常に不可能なことをよく研究して試み、普通に勝つことができる。

教師は改革者である。彼は人生を弱め滅ぼすような障害を改善しようと努める。

教師は信ずる者である。彼は神に永遠の信仰をもち人類の進歩を信じてい

る。「教育には明らかに2つのものがある。1つはどのようにして生計をたてるかを教え、もう1つはいかにして生きるかを教える。」ジェームス・T・アダムスはそう言っている。

我々は人にいかに生きるかを教えるために働いているのである。

エルバート・ハーバードは次のように語った。「あなた方はだれにも何ごとも教えることはできない。ただ彼が自分自身を見出すのを助けるだけである。」

これが救い主のみこころなのである。主は我々が守ることによってそれぞれの問題を解決し得る聖なる原則を教えられた。救い主は教師として類まれなお方である。

しばらくの間、ルカの福音書第15章を考えてみることにしよう。偉大なる教師が、我々のよく直面する問題の解決方法を教えておられる。大勢の群衆、取税人、罪人たち、パリサイ人、サドカイ人たちが主の近くに寄って来た時、主が彼らにこのたとえ話をされたことをルカは記している。「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて……捜し歩かないであろうか。」

それから主はその羊が見つかった時の喜ばしい瞬間について話された。そしてすぐ息もつかせず次のたとえ話をされた。「また、ある女が銀貨十枚を持っていて、もしその一枚をなくしたとすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、それを見つけるまでは注意深く捜さないであろうか。そして、見つけたなら女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。なくした銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。」(ルカ15:4, 8-9)

それから最もよく知られた、かの放蕩息子の話をなさった。「ある人にふたりのむすこがあった。弟が父親に言

った。『父よ、あなたの財産のうちで私がいただく分をください』そこでその息子が自分の気ままにその財産をどのように放蕩に使い果してしまったかを私たちは知っている。(ルカ15: 11-32参照)

私はいわゆる教師として、なぜ主は失われた物について3つものたとえ話をされ時間を費やされたのであろうかとよくいぶかったものである。ある日それをようやく理解することができた。人々はさまざまな方面で道を失っている。このルカの偉大な章の中で、私たちは彼らを立ち直らせるために主がどのように忠告してくださっているかに気づくのである。

次のように考えることをお許しいたきたい。救い主はこのたとえ話をもう一度私たちに教えてくださるとすれば、次のように言われるであろう。

「かの羊(あるいは失われた人)は、生まれつきにしても選択によっても、本質的には罪人ではない。ただ羊と同じように、何が重要かということについて混乱しているのである。言い換えれば、彼らは価値を置き違えたのである。」私は救い主がクラスの教師に対し、また助言者に対し次のように言われるであろうと確言している。「もしこのような人間をもとに戻そうとするならば、彼が今選ぶものにより高い価値を置きなさい。」家族、奉仕、それに兄弟愛は皆今日の羊のための緑の牧場なのである。

養うことは彼らを家へ連れ戻すことになる。

次に、主は失われた銀貨について話された。

この大会では失われた貨幣一若者たちについて話し合われた。この偉大な教訓あふれるたとえ話の中の女のように、値知れぬ宝石を指の間からむなしくとり落としてしまった責任のある人がいる。確かに私たちはこのようなものを取り戻すのに羊にするような方法

はとらないであろう。主はおおせになる。愛情と配慮そして思いやりとが失われた貨幣(あるいは人びと)を取り戻す方法であると。

それからかの放蕩息子についての偉大なたとえ話であるが、そこで救い主は自分の意志で道を誤った人のことを述べられ、次の言葉でこの話をしめくられた。「そこで彼(放蕩息子)は本心に立ちかえって言った。『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいる……』」(ルカ15: 17)

自由意志で道を誤った人々がいる。このような人々を立ち直らせるためには、ただ我々の胸と教会の戸を開いて、彼らが待ち望まれていることを知らせる以外に多くをすることはできない。ここで必要となるのが教師であり助言者であるのである。しかし注意してほしい。彼は本心に立ち返ったのである。彼は悔やみ、許しを願い願い家に帰ってきたのである。大勢の人はこの放蕩息子のようではないだろうか。

結論を言わせていただければ、これは確かな福音なのである。我々は世界で一番幸福な者とならなければならぬ。イエス・キリストの福音は偉大なものを築きあげる力である。それは私たちにいつも幸福でほほ笑みをたたえているように教えてくれる。しかし時として私たちは、単純な事柄が大いなる意味を持っていることを無視してしまいがちである。多くの人々は近代社会の生活に追いまくられて、真の友情と、福音がもたらす、いやほほ笑みですらもたらすことのできる暖かさを知らない。

私の知人の1人がしかめっ面をしながら街を歩いている人に気づいて言った。「あの人はまるでレモン・ジュースとインド漬のきゅうりの上に捨てられてしまったかのようだ。」

私はまた、演説をしている人に聞き入っていた母娘がいてその娘が母親に「あの人は幸せじゃないのね」と言い、

それに答えて母親が「そうでしょうね」と答え、娘がさらに「どうしてあの人は自分の困っていることを話さないのかしら」と言ったのを聞いた。

私は思う。天父がもし私たちのだれかが世の中で人と人との結びつきをおさえたり、他人と分ち合おうとするのをはばむものがあるといった表情をしたら、さぞがっかりなさるだろう。イエス・キリストの福音の意味と目的は私にとってよるこびと幸福、平和と満足をもたらすものなのである。

我々は皆問題をかかえている。世界は問題に病み疲れている。しかし標準聖典にある聖なる言葉の中には、私たちが直面している問題の解決方法がある。神のみ言葉を知ることによって世界を勇気づけようではないか。

新約聖書の中には他に私たちに他の人々を助ける方法を教えてくれるたとえ話がある。その聖句を探しなさい。永遠の生命への道をそこに発見するだろうから。

私の証は福音がまことのものであって生きていることである。

「私は乞食に金貨を与えた。彼はその金貨を使い果たし、またやって来た。何度も、何度も、前と同様にこごえ飢えて。

私は彼に思考を与えた。私の思考の中の思考を。

彼は己れ自身に立ち帰った。人間にこの上ない、天与の生命をもった人間に。

食物を与えられ、衣服を着せられ、福音を頭に宿して、もはや物乞いなど二度としない。」

(作者不明「真のおくりもの」より引用)

これがイエス・キリストの福音なのである。私はイエス・キリストのみ名によって、心からこの証を終る。

アーメン。

証を育て活発に奉仕しましょう

トモスエ・アボ

私たちが日本に来てからもう1年以上になります。この短い時間に、私たちはめざましい進歩を見てきました。数多くの人が改宗し、教会のいろいろなプログラムに参加した人々は霊的に非常な進歩をとげました。多くの人がこれまでにこんな幸福を味わったことはないと言って、会員になった喜びを言い表わしています。会員が盛んに活動し、信仰と証を強くするにつれて、個性は開花し、生活は豊かになって、地域社会においても良い市民になっていきます。会員の前には生活が大きく開けてきますので、永久に手が届かないと思っていた高価な贈り物を教会がもたらしてくれたことがだんだんわかってきます。この贈り物とは、現世の生活を平和に暮らせることと、来世で永遠の生命が得られるという確信です。

教会のためには何でも喜んでほしい。福音のためには何でも犠牲にしたいと感じます。これが改宗のもたらす力です。開拓者が大平原を横断し、砂漠を征服したのは、このような信仰によったのです。

多くの人が今このすばらしい思いを持っています。さらにもっと多くの人がこの喜びを味わい、幸福になることでしょう。しかし、一部に力の限りを尽くして主に仕えるつもりのない人がいます。また全然奉仕していない人もいます。福音に対する証はなくなり得るものです。証は絶えず育てる必要があります。証は私たちの活動状況に応じて強くなったり弱くなったりします。私たちが証を育てるためにしなければならぬことをほんの2、3あげても次のようなものがあります。だれが指導者になっても指導者を愛し、支持すること。絶えず天父なる神に祈りを捧げ、神に近くあること。什分の一と捧げ物を納め、安息日を守ること、など。

私たちのために命を失い、ゲッセマネで血の汗を流された主、また十字架上で非常な苦しみにあい、「われ神、すなわちすべての最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ」と言われた主は、上記のように戒めを守る人を

どう思われるでしょうか。

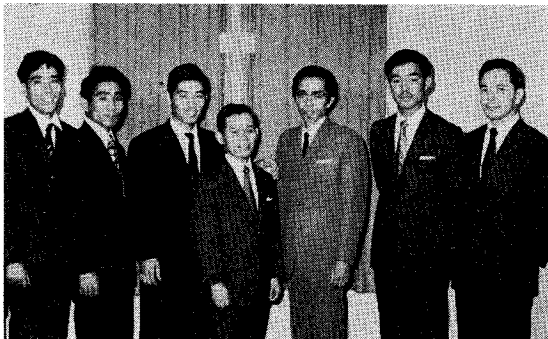
私たちは皆神の王国建設を助けるように召されています。神の王国を建設するには、神のすべての戒めに従わなければなりません。神はこのように求めておられます。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」私たちはまたいつも自分に帰ってくる報いを考えることなくほかの人を助けなければなりません。

「自分の命を得ている者はそれを失う」という言葉はこれまでに言われたどんな言葉にも増して真実です。これは教会における奉仕に当てはめて言うことができます。同様に、「わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう」という言葉も真実です。

主の目から見る時、無私の奉仕は進歩の鍵となるものです。私たちの好きな讃美歌の歌詞にも、「天の恵みのいけにえ……」(144番)という言葉があります。主のみ業に雄々しく仕える者だけが主の最高の報いを受ける(教義と聖約76:78-79)ことを読み、主が善き業に従い、多くのことをその自由意志によりて為す(教義と聖約58)よう、勧告しておられることを知れば、「これをすればどんな得になるだろうか」ということしか考えない人が受ける分はすぐわかります。

神があなたがたを祝福したもうて、天父なる神に仕えてはじめて本当の喜びと幸福が味わえることを理解できますように。私は教会に加入して30年になりますが、その間ずっと幸福でした。私は数え切れないほどの祝福に本当に感謝しています。もしもう1度人生をやりなおせるとしたら、私は全く同じ人生を選びます。私は本当に日本人を愛しています。私は教会を受け入れ、主の業に活発に従事することによって、生活が意味のあるものになることを知っています。活発であって下さい。皆さんの指導者たちが指示することを勇気をもって実行して下さい。指導者たちは完全ではありませんが、神から召されていることを覚えて下さい。へりくだって彼らに従って下さい。

大阪ステーキ部続き



かし親しい兄弟から深夜に及ぶ励ましを受けたこともあって、教会に尽くす決心がつかしました。」神尾兄弟は2カ月後東京に転勤が決まっていたのだった。副ステーキ部長、高等評議員、各ワード部監督、それに会衆全員が一丸となってステーキ部長を支持し、み業の発展に尽くす雰囲気のみなき

ワード部監督

(写真右から)

大阪ワード部監督(旧大阪支部)中野正之
大阪第2ワード部監督(旧大阪第2支部)浜田博之
大阪第3ワード部監督(旧東大阪支部)平川友正
岡町ワード部監督(旧岡町支部)安芸宏
神戸ワード部監督(旧神戸支部)水野敬一
西宮ワード部監督(旧西宮支部)福屋航二
京都ワード部監督(旧京都支部)川口高司
なお、大阪ステーキ部に、尼崎、守口、堺、吹田、高槻、和歌山の6つの支部が所属する。

たすばらしい特別大会であった。

小松兄弟の新役員支持の後、ペンソン長老は自ら立たれてさらに1つの重要な召しを発表された。それは祝福師の職であった。元第1副伝道部長の鈴木正三兄弟が、信仰と祈りのうちにステーキ部祝福師に支持された。

仙台ユース・コンファレンス開かる



◇ 深緑の8月11, 12の両日, 森の都仙台で, 若者の祭典ユース・コンファレンスが開かれた。

◇ はるばる貸切バスで駆けつけた北海道人と東北人との出会いである。お互いに素朴で真正直な田舎者同志だが, それだけに心暖まる数々の楽しいシーンがくりひろげられた。



◇ 第1回の陸上競技は, 仙台市のだ真中にある県営宮城球場で展開された。走る, 跳ぶ, 投げる。若ものたちの青春をぶっつけ合うかのように, 広い球場一杯が若さでみなぎる。観客席には殆んど人影はない。文字通り全員参加であった。



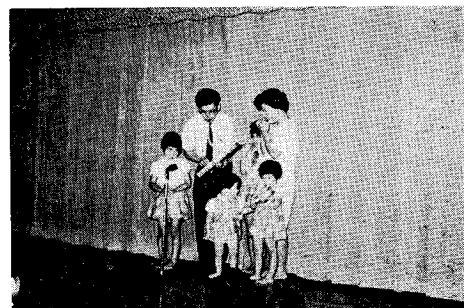
◇ 運動をすれば腹が空く。あくまでも単純な論理だが, ランニング姿からパリッとしたドレスや背広姿に変身した紳士淑女諸君も, 料理や飲物を前にして再び餓鬼に変身し, 空のお皿やコップが重ねられてゆく。

◇ 夜の音楽祭には仙台・山形・札幌・室蘭の兄弟姉妹たちが美しいコーラスを聞かせてくれた。また帯広伝道所のドラマ「白雪姫」は楽しい出しものであった。

◇ 第2日は早朝5時半からのセミナー。10の分科会に分かれて, 恋愛・結婚・系図などのテーマで語り合う。

◇ そして観光バス旅行。みちのくの名所旧跡に, 思い思いに散って行った若ものたち。楽しい歓声が緑の野山にこだまする。

◇ 夜は再び盛装してダンスに興ずる。小樽・山形の兄弟たちのバンドが若さをかきたてる。2日間のユース・コンファレンスは, 翌日の神権会・証詞会を残して幕を閉じた。



◇ ローカル色豊かな, そして自然に十分触れることのできた大会であった。今でも目にしみるような緑や, 虫や鳥の鳴き声が思い出される。そんな感じの大会であった。「ありがとう東北の兄弟姉妹たち。来年は再び北海道で会おう。」「さようなら, 北海道の兄弟姉妹たち。来年は待っていてくれ。」別れを惜しむ人々の上に雨が降り注ぐ。



日本西部伝道部

第1回ファミリーキャンプ 開かる

去る8月10日、雄大な阿蘇の外輪山を左手に見ながら、北は福山、松江、南は鹿児島、沖縄から子供連れの家族やお年寄り、若い兄弟姉妹約450名がこの涼しい瀬の本高原ホテルに到着しました。家族単位の救いを信じ、そのために力を注いでいる多くのモルモンの家族が一堂に会して語り、考え、楽しむ機会を、という西部伝道部の長年の夢をこのファミリーキャンプは充分にかなえてくれました。3日間にわたるこのプログラムは、渡辺伝道部長の管理のもとに家族と若い兄弟姉妹を中心にして、瀬の本の広々とした緑の草原いっぱいにくりひろげられました。11日朝のモルモン経輪読会を終え、食事を済ませると、幼、小、中、高、若人、既婚者に分かれて、「進学と就職」、「結婚と交際」、「親と子の関係」について皆くつろいだ雰囲気の中で熱心に語り合いました。午後は、丘を渡って吹いてくるさわやかな風にふかれ、家族と若人のグループに分かれてのピクニック。高原の澄みわたった空気を心ゆくまで味わい、ゲームや愉快的催しに全員大喜びでした。翌日12日は朝のワークショップを終えると、午後から運動会とスポーツ大会。ホテルのグラウンドに老いも若きも全員集合して、お父さんと子供の二人三脚、お母さんと一緒に、障害物競争、借り物競争、騎馬戦など盛りだくさんのプログラムを楽しみました。

8月13日は同ホテルの大広間で伝道部大会が開かれました。この大会のために遠方の各支部から集った530名の兄弟姉妹の力強い証を聞き、また靈感あふれる指導者の話を聞くことができました。このファミリーキャンプのうえに主のみ手があり、この大行事を無事に終えることができたことを心から感謝し、またこのキャンプのためにホテルを提供して下さった一の宮支配人(熊本支部支部長)に感謝します。別れにあたって、全員再会を約し、楽しい思い出と心とをトランクにいっぱいにつめて帰途につきました。

